

# 雄 城 台 遺 跡

～大分県立大分雄城台高等学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～





南東方向から雄城台遺跡（中央）を望む  
〈2020年5月12日撮影〉



第9次調査空中写真（南東から）



巴形銅器 表面



巴形銅器 裏面



第9次調査 巴形銅器出土状態



第8次調査 溝遺物出土状態



第7次調査区 (北から)



第2次調査区 (北西から)

## 序 文

昭和30年代後半から昭和40年代の前半は、高度経済成長により特定地域への人口集中が加速し、大分市内では、生徒数の増加による高校建設が急務となりました。そのような状況の中、白羽の矢が立ったのが、当時一面桑畑であった雄城台だったのです。雄城台は以前より弥生時代の遺跡として知られており、当時同じく高校建設が計画された宇佐市の四日市台地（台の原遺跡）とともに、大分県教育委員会として初めての本格的な発掘調査を実施したのでした。

調査では、その後続々と見つかることになる中国鏡片が県内で初めて出土し、さらにはそれまで詳細の分からなかった東九州の弥生土器の実態が明らかになるなど、大きな成果をあげました。その後刊行された『大分県の歴史』（大分合同新聞社刊）や『大分県史先史篇Ⅱ』（大分県刊）などにそれらの成果は生かされることになりました。

しかしながら、諸般の事情により発掘調査報告書は未刊のまま今日に至りました。それは平成になって調査された第9次調査についても同様でした。調査要因が県教育委員会による学校建設に関わるということを鑑みても、このまま未刊で終わることは許されるのではなく、平成26年より7ヶ年で報告書を作成する計画を立て、ようやく今般刊行の運びとなりました。

当時、発掘調査に関わった方々はもちろん、埋蔵文化財が国民共有の財産であることを考えると、刊行が最初の発掘調査から半世紀もたってしまったことにつきましてすべての皆様方にお詫びを申し上げますとともに、今後この報告書が大分県の弥生時代研究で大いに活用されることを願いたいと思います。

令和3年3月31日  
大分県立埋蔵文化財センター  
所長 松本昌浩

## 例 言

- ・本書は、大分県立大分雄城台高等学校建設および付属施設建設にあたり、大分県教育委員会が昭和46年から平成6年にかけて9回の発掘調査を行った埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- ・遺構番号は、発掘調査から長い年月がたち、様々な書籍等で調査時の遺構番号（特に鏡が出土した遺構など）が使われることが多かったことから、混乱を避けるため本書でも調査時の遺構番号をそのまま使用している。そのため、同じ号数の遺構が複数あるなど分かりづらい面も生じたが、ご理解いただきたい。
- ・各遺構図の北は「磁北」を示しており、地形図に落とした遺構図の北は「座標北」を示している。
- ・1次調査から8次調査の図面整理、および断面図の原因作成は、平成25年に友廣美和（当時大分県教育庁埋蔵文化財センター非常勤職員）が行った。
- ・整理作業は平成26年度から令和元年度にかけて株式会社九州文化財総合研究所に一部委託（平成27年度までは洗浄、接合、実測、遺構・遺物実測図トレースを、28年度以降はそれらに加えて遺物写真撮影を委託）でおこなった。一部の遺構のトレースについては小野千恵美、岡本瑛梨、木戸倫、田中詩織、佐々木茂伸、東晃平（以上、令和2年度大分県立埋蔵文化財センター会計年度任用職員）がおこなった。
- ・本書の執筆は、第2章第10節を9次調査を担当した小林昭彦（執筆時大分県立埋蔵文化財センター非常勤職員）、第4章第2節を高橋徹（元大分県立歴史博物館館長）、その他を小柳和宏（大分県立埋蔵文化財センター会計年度任用職員）が行ったが、第2章第9節については、概要報告書（昭和62年、大分県教育委員会刊）から多くを引用している。その個所の執筆者は8次調査を担当した高橋信武（執筆時大分県教育委員会文化課主任）である。また、同書からは調査の経過（第1章第1節）についても参考にしている。その個所の執筆者は1次調査から調査に携わった清水宗昭（執筆時大分県教育委員会文化課主査）である。また、第3章自然科学的調査については、9次調査で出土した巴形銅器を出土後すぐに当時東京国立文化財研究所に在籍されていた平尾良光氏に分析を依頼し、平成7年（1995）3月11日付けで提出頂いた報告書である。報告書中の肩書きは当時のままである。
- ・第403図と第404図については、アジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許3670274、特許4272146）を使用し、小柳が作成したものである。
- ・本書の編集は小柳が行った。



# 目次

巻頭図版

序文

例言

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯と調査の経過	1
第2節	遺跡の立地と環境	1
第2章	発掘調査の成果	4
第1節	調査の概要	4
第2節	第1次調査	7
第3節	第2次調査	25
第4節	第3次調査	36
第5節	第4次調査	55
第6節	第5次調査	83
第7節	第6次調査	102
第8節	第7次調査	136
第9節	第8次調査	226
第10節	第9次調査	240
第11節	その他の出土遺物	268
第3章	自然科学的調査	271
第4章	総括	283
第1節	雄城台遺跡と東九州弥生社会の歴史的位置づけ	283
第2節	大分県内における鏡の廃棄	316
遺構一覧表		321
遺物観察表		325
写真図版		
報告書抄録		

## 图版目次

第1图	周边遗迹位置图	4
第2图	调查区位置图	5
第3图	全体遺構配置図	6
第4图	1次調査区遺構配置図	7
第5图	基本順序	8
第6图	1次1号堅穴建物	8
第7图	1次2号堅穴建物	9
第8图	1次2号堅穴建物出土遺物	9
第9图	1次4、5、6、7号堅穴建物出土遺物	10
第10图	1次4号堅穴建物出土遺物	11
第11图	1次5号堅穴建物出土遺物①	11
第12图	1次5号堅穴建物出土遺物②	12
第13图	1次7号堅穴建物出土遺物	12
第14图	1次1号土坑	13
第15图	1次1号土坑出土遺物	13
第16图	1次3、8号土坑	13
第17图	1次3号土坑出土遺物	14
第18图	1次9号土坑出土遺物	14
第19图	1次10号土坑	14
第20图	1次10号土坑出土遺物	15
第21图	1次12号土坑	16
第22图	1次12号土坑出土遺物	16
第23图	1次13号土坑	16
第24图	1次一括遺物①	17
第25图	1次一括遺物②	18
第26图	1次一括遺物③	19
第27图	1次一括遺物④	20
第28图	1次一括遺物⑤	21
第29图	1次一括遺物⑥	22
第30图	1次一括遺物⑦	23
第31图	1次一括遺物⑧	24
第32图	2次調査区遺構配置図	25
第33图	2次3号堅穴建物	26
第34图	2次3号堅穴建物出土遺物	27
第35图	2次4号堅穴建物	28
第36图	2次4号堅穴建物出土遺物	28
第37图	2次5号堅穴建物	29
第38图	2次5号堅穴建物出土遺物	30
第39图	2次1、2号堅穴建物出土遺物	31
第40图	2次土器群遺物①	32
第41图	2次土器群遺物②	33
第42图	2次一括遺物①	34
第43图	2次一括遺物②	35
第44图	3次調査区遺構配置図	36
第45图	3次A1号堅穴建物	37
第46图	3次A1号堅穴建物出土遺物	38
第47图	3次A2号堅穴建物	39
第48图	3次A2号堅穴建物出土遺物	40
第49图	3次A3号堅穴建物	41
第50图	3次A3号堅穴建物出土遺物	42
第51图	3次A4号堅穴建物	42
第52图	3次A5号堅穴建物	43
第53图	3次A5号堅穴建物出土遺物	43
第54图	3次A6号堅穴建物	44
第55图	3次A6号堅穴建物出土遺物	44
第56图	3次A7号堅穴建物	45
第57图	3次A7号堅穴建物出土遺物	45
第58图	3次B1、B2号堅穴建物	46
第59图	3次B1号堅穴建物出土遺物	46
第60图	3次B2号堅穴建物出土遺物①	47
第61图	3次B2号堅穴建物出土遺物②	48
第62图	3次B3号堅穴建物	49
第63图	3次B3号堅穴建物出土遺物	50
第64图	3次B4号堅穴建物	50
第65图	3次B4号堅穴建物出土遺物	51
第66图	3次B5号堅穴建物出土遺物	51
第67图	3次A1、A2号堅穴建物出土遺物	52
第68图	3次一括遺物①	53
第69图	3次一括遺物②	54
第70图	4次調査区遺構配置図	55
第71图	4次1号堅穴建物	56
第72图	4次1号堅穴建物出土遺物	56
第73图	4次2号堅穴建物	57
第74图	4次2号堅穴建物出土遺物	58
第75图	4次3号堅穴建物	58
第76图	4次3号堅穴建物出土遺物	59
第77图	4次4号堅穴建物	60
第78图	4次4号堅穴建物出土遺物	60
第79图	4次5、9、10号堅穴建物	61
第80图	4次5号堅穴建物出土遺物	61
第81图	4次6号堅穴建物	62
第82图	4次6号堅穴建物出土遺物	62
第83图	4次7、11号堅穴建物と7号堅穴建物出土遺物	62
第84图	4次8号堅穴建物出土遺物	63
第85图	4次10号堅穴建物出土遺物	63
第86图	4次11号堅穴建物出土遺物	64
第87图	4次16号堅穴建物出土遺物	64
第88图	4次26、17号堅穴建物	65
第89图	4次20、24号堅穴建物	66
第90图	4次20号堅穴建物出土遺物	67
第91图	4次21号堅穴建物	68
第92图	4次21号堅穴建物出土遺物	69
第93图	4次22号堅穴建物	69
第94图	4次22号堅穴建物出土遺物	70
第95图	4次23号堅穴建物	70
第96图	4次23号堅穴建物出土遺物	70
第97图	4次25号堅穴建物	71
第98图	4次25号堅穴建物出土遺物	71

第99图	4次26、29号竖穴建物	72	第149图	5次9号土坑出土遺物	99
第100图	4次26号竖穴建物出土遺物	73	第150图	5次11土坑	99
第101图	4次28号竖穴建物出土遺物	73	第151图	5次11号土坑出土遺物	99
第102图	4次29号竖穴建物出土遺物①	74	第152图	5次20土坑	99
第103图	4次19号竖穴建物出土遺物②	75	第153图	5次20土坑出土遺物	100
第104图	4次30号竖穴建物出土遺物	75	第154图	5次23土坑	100
第105图	4次12号土坑	75	第155图	5次24土坑出土遺物	101
第106图	4次13号土坑	76	第156图	5次一括遺物	101
第107图	4次15号土坑	76	第157图	6次調査区遺構配置図	102
第108图	4次15号土坑出土遺物	77	第158图	6次1号竖穴建物	103
第109图	4次17号土坑	77	第159图	6次1号竖穴建物出土遺物	104
第110图	4次17号土坑出土遺物	78	第160图	6次2号竖穴建物	105
第111图	4次27号土坑	78	第161图	6次2号竖穴建物出土遺物①	106
第112图	4次33号土坑	78	第162图	6次2号竖穴建物出土遺物②	107
第113图	4次101号土坑	79	第163图	6次3号竖穴建物	108
第114图	4次101号土坑出土遺物	79	第164图	6次3号竖穴建物出土遺物	109
第115图	4次南壁土坑	79	第165图	6次4号竖穴建物	110
第116图	4次南壁土坑出土遺物	79	第166图	6次4号竖穴建物出土遺物①	111
第117图	4次一括遺物①	80	第167图	6次4号竖穴建物出土遺物②	112
第118图	4次一括遺物②	81	第168图	6次5号竖穴建物	113
第119图	5次区遺構配置図	83	第169图	6次5号竖穴建物出土遺物	114
第120图	5次1号竖穴建物	84	第170图	6次6号竖穴建物	115
第121图	5次1号竖穴建物出土遺物	85	第171图	6次6号竖穴建物出土遺物	115
第122图	5次3号竖穴建物	85	第172图	6次7号竖穴建物	116
第123图	5次3号竖穴建物出土遺物	86	第173图	6次7号竖穴建物出土遺物①	117
第124图	5次4号竖穴建物	87	第174图	6次7号竖穴建物出土遺物②	118
第125图	5次4号竖穴建物出土遺物	88	第175图	6次8号竖穴建物	119
第126图	5次10号竖穴建物	88	第176图	6次8号竖穴建物出土遺物	120
第127图	5次10号竖穴建物出土遺物	89	第177图	6次9号竖穴建物出土遺物	120
第128图	5次12、16、17号竖穴建物	90	第178图	6次10号竖穴建物	121
第129图	5次12号竖穴建物出土遺物	91	第179图	6次10号竖穴建物出土遺物	122
第130图	5次13号竖穴建物	92	第180图	6次13、14、19、22号竖穴建物	123
第131图	5次13号竖穴建物出土遺物	92	第181图	6次13号竖穴建物出土遺物	124
第132图	5次14号竖穴建物出土遺物	92	第182图	6次14号竖穴建物出土遺物	124
第133图	5次15号竖穴建物出土遺物	92	第183图	6次15号竖穴建物	125
第134图	5次14、15号竖穴建物	93	第184图	6次15号竖穴建物出土遺物	126
第135图	5次16号竖穴建物出土遺物	93	第185图	6次18、23、24、25、26号竖穴建物	127
第136图	5次17号竖穴建物出土遺物	94	第186图	6次18号竖穴建物出土遺物	128
第137图	5次1B土坑	94	第187图	6次23号竖穴建物出土遺物	128
第138图	5次1B土坑出土遺物	94	第188图	6次24号竖穴建物出土遺物	128
第139图	5次2号土坑	95	第189图	6次25号竖穴建物出土遺物	129
第140图	5次2号土坑出土遺物	95	第190图	6次1号掘立柱建物	129
第141图	5次5号土坑出土遺物	95	第191图	6次1号土坑	130
第142图	5次6土坑	96	第192图	6次2号土坑	130
第143图	5次6号土坑出土遺物	96	第193图	6次一括遺物①	130
第144图	5次7土坑	96	第194图	6次一括遺物②	132
第145图	5次7号土坑出土遺物	97	第195图	6次一括遺物③	133
第146图	5次8土坑	98	第196图	6次一括遺物④	134
第147图	5次8号土坑出土遺物	98	第197图	6次一括遺物⑤	135
第148图	5次9土坑	98	第198图	7次調査区遺構配置図	136

第 199 図	7 次 1 号堅穴建物	137	第 249 図	7 次 4 号袋状ビット	169
第 200 図	7 次 1 号堅穴建物出土遺物①	138	第 250 図	7 次 4 号袋状ビット出土遺物	170
第 201 図	7 次 1 号堅穴建物出土遺物②	139	第 251 図	7 次 5 号土坑出土遺物	170
第 202 図	7 次 3、4 号堅穴建物	140	第 252 図	7 次 6 号土坑	171
第 203 図	7 次 3 号堅穴建物出土遺物	140	第 253 図	7 次 6 号土坑出土遺物	172
第 204 図	7 次 6 号堅穴建物出土遺物	141	第 254 図	7 次 7 号土坑	172
第 205 図	7 次 7 号堅穴建物、32 号土坑	141	第 255 図	7 次 7 号土坑出土遺物	173
第 206 図	7 次 7 号堅穴建物出土遺物①	142	第 256 図	7 次 8 号土坑	173
第 207 図	7 次 7 号堅穴建物出土遺物②	143	第 257 図	7 次 8 号土坑出土遺物①	174
第 208 図	7 次 8 号堅穴建物出土遺物	143	第 258 図	7 次 8 号土坑出土遺物②	175
第 209 図	7 次 9 号堅穴建物	144	第 259 図	7 次 9 号土坑	176
第 210 図	7 次 10 号堅穴建物	144	第 260 図	7 次 9 号土坑出土遺物	177
第 211 図	7 次 10 号堅穴建物出土遺物	145	第 261 図	7 次 11 号土坑	177
第 212 図	7 次 11 号堅穴建物出土遺物	146	第 262 図	7 次 11 号土坑出土遺物	178
第 213 図	7 次 12 号堅穴建物	147	第 263 図	7 次 12 号土坑出土遺物	178
第 214 図	7 次 12 号堅穴建物出土遺物	148	第 264 図	7 次 13、14、15 号土坑	179
第 215 図	7 次 13 号堅穴建物出土遺物	148	第 265 図	7 次 13 号土坑出土遺物	179
第 216 図	7 次 14 号堅穴建物	149	第 266 図	7 次 14 号土坑出土遺物	180
第 217 図	7 次 14 号堅穴建物出土遺物	150	第 267 図	7 次 16 号土坑	181
第 218 図	7 次 15、25 号堅穴建物	151	第 268 図	7 次 16 号土坑出土遺物	181
第 219 図	7 次 15 号堅穴建物出土遺物	151	第 269 図	7 次 17、18 号土坑	182
第 220 図	7 次 16、24 号堅穴建物	152	第 270 図	7 次 17 号土坑出土遺物	182
第 221 図	7 次 16 号堅穴建物出土遺物	152	第 271 図	7 次 18 号土坑出土遺物①	183
第 222 図	7 次 17、81 号堅穴建物	153	第 272 図	7 次 18 号土坑出土遺物②	184
第 223 図	7 次 17 号堅穴建物出土遺物	153	第 273 図	7 次 18 号土坑出土遺物③	185
第 224 図	7 次 18 号堅穴建物出土遺物	153	第 274 図	7 次 19 号土坑	186
第 225 図	7 次 19 号堅穴建物	154	第 275 図	7 次 19 号土坑出土遺物	186
第 226 図	7 次 19 号堅穴建物出土遺物	155	第 276 図	7 次 20 号土坑出土遺物	187
第 227 図	7 次 20 号堅穴建物	155	第 277 図	7 次 21 号土坑出土遺物	187
第 228 図	7 次 20 号堅穴建物出土遺物	156	第 278 図	7 次 22 号土坑	188
第 229 図	7 次 23 号堅穴建物	156	第 279 図	7 次 22 号土坑出土遺物	188
第 230 図	7 次 23 号堅穴建物出土遺物	156	第 280 図	7 次 23 号土坑	189
第 231 図	7 次 24 号堅穴建物出土遺物	157	第 281 図	7 次 23 号土坑出土遺物	190
第 232 図	7 次 25 号堅穴建物出土遺物	158	第 282 図	7 次 24 号土坑	191
第 233 図	7 次 26、28 号堅穴建物	159	第 283 図	7 次 24 号土坑出土遺物	191
第 234 図	7 次 26 号堅穴建物出土遺物	159	第 284 図	7 次 25 号土坑	191
第 235 図	7 次 27 号堅穴建物	160	第 285 図	7 次 25 号土坑出土遺物	191
第 236 図	7 次 27 号堅穴建物出土遺物①	160	第 286 図	7 次 26 号土坑	192
第 237 図	7 次 27 号堅穴建物出土遺物②	161	第 287 図	7 次 26 号土坑出土遺物	192
第 238 図	7 次 29 号堅穴建物出土遺物	162	第 288 図	7 次 27 号土坑	193
第 239 図	7 次 30 号堅穴建物	163	第 289 図	7 次 27 号土坑出土遺物①	194
第 240 図	7 次 1 号土坑	163	第 290 図	7 次 27 号土坑出土遺物②	195
第 241 図	7 次 1 号土坑出土遺物	163	第 291 図	7 次 27 号土坑出土遺物③	196
第 242 図	7 次 2 号土坑	164	第 292 図	7 次 28 号土坑	196
第 243 図	7 次 2 号土坑出土遺物	165	第 293 図	7 次 28 号土坑出土遺物	197
第 244 図	7 次 3 号土坑	165	第 294 図	7 次 29 号土坑	198
第 245 図	7 次 3 号土坑出土遺物	165	第 295 図	7 次 30 号土坑	198
第 246 図	7 次 4 号土坑	166	第 296 図	7 次 30 号土坑出土遺物	198
第 247 図	7 次 4 号土坑出土遺物①	167	第 297 図	7 次 31 号土坑	199
第 248 図	7 次 4 号土坑出土遺物②	168	第 298 図	7 次 34、35 号土坑	199

第 299 图	7 次 34 号土坑出土遺物	199	第 349 图	8 次溝出土遺物⑥	234
第 300 图	7 次調査 35 号土坑出土遺物	200	第 350 图	8 次 1 号土坑	235
第 301 图	7 次 37 号土坑	200	第 351 图	8 次 2 号土坑	236
第 302 图	7 次 37 号土坑出土遺物①	201	第 352 图	8 次 3 号土坑	236
第 303 图	7 次 37 号土坑出土遺物②	202	第 353 图	8 次 4、5、6 号土坑	236
第 304 图	7 次 38 号土坑	203	第 354 图	8 次 4 号土坑出土遺物	237
第 305 图	7 次 39 号土坑	203	第 355 图	8 次 7 号土坑	237
第 306 图	7 次 39 号土坑出土遺物①	204	第 356 图	8 次 8 号土坑	237
第 307 图	7 次 39 号土坑出土遺物②	205	第 357 图	8 次 9 号土坑	238
第 308 图	7 次 40 号土坑	205	第 358 图	8 次一括遺物	238
第 309 图	7 次 25 号土坑出土遺物	206	第 359 图	9 次調査区遺構配置図	240
第 310 图	7 次 41、42 号土坑	206	第 360 图	9 次調査区土層図	241
第 311 图	7 次 41 号土坑出土遺物	206	第 361 图	9 次 1、4 号竪穴建物	242
第 312 图	7 次 42 号土坑出土遺物	206	第 362 图	9 次 2、3、5 号竪穴建物、2、3 号土坑	243
第 313 图	7 次 43 号土坑出土遺物	207	第 363 图	9 次 6 号竪穴建物	245
第 314 图	7 次 45 号土坑出土遺物	207	第 364 图	9 次 7 号竪穴建物	246
第 315 图	7 次 46 号土坑出土遺物①	208	第 365 图	9 次 8 号竪穴建物	247
第 316 图	7 次 46 号土坑出土遺物②	209	第 366 图	9 次巴形銅器出土状態	248
第 317 图	7 次 47 号土坑	209	第 367 图	9 次 1 号土坑	248
第 318 图	7 次 47 号土坑出土遺物	209	第 368 图	9 次 4 号土坑	249
第 319 图	7 次 48 号土坑	210	第 369 图	9 次 5 号土坑	249
第 320 图	7 次 48 号土坑出土遺物	210	第 370 图	9 次 6 号土坑	250
第 321 图	7 次 49 号土坑	210	第 371 图	9 次 7 号土坑	250
第 322 图	7 次 49 号土坑出土遺物	210	第 372 图	9 次 8 号土坑	250
第 323 图	7 次 50 号土坑	210	第 373 图	9 次 9 号土坑	251
第 324 图	7 次 51 号土坑	211	第 374 图	9 次 10 号土坑	251
第 325 图	7 次 52 号土坑	211	第 375 图	9 次 11 号土坑	251
第 326 图	7 次 54 号土坑	212	第 376 图	9 次 12 号土坑	252
第 327 图	7 次 54 号土坑出土遺物	212	第 377 图	9 次 1 号溝	253
第 328 图	7 次 55、58 号土坑	213	第 378 图	9 次 2 号溝	254
第 329 图	7 次 55 号土坑出土遺物	213	第 379 图	9 次出土遺物①	255
第 330 图	7 次 60 号土坑	214	第 380 图	9 次出土遺物②	256
第 331 图	7 次 60 号土坑出土遺物	215	第 381 图	9 次出土遺物③	257
第 332 图	7 次 9 号住東南土坑出土遺物	216	第 382 图	9 次出土遺物④	258
第 333 图	7 次 2 号溝	217	第 383 图	9 次出土遺物⑤	259
第 334 图	7 次 2 号溝出土遺物①	218	第 384 图	9 次出土遺物⑥	260
第 335 图	7 次 2 号溝出土遺物②	219	第 385 图	9 次出土遺物⑦	261
第 336 图	7 次一括遺物①	221	第 386 图	9 次出土遺物⑧	262
第 337 图	7 次一括遺物②	222	第 387 图	9 次出土遺物⑨	263
第 338 图	7 次一括遺物③	223	第 388 图	9 次出土遺物⑩	264
第 339 图	7 次一括遺物④	224	第 389 图	9 次出土遺物⑪	265
第 340 图	7 次一括遺物⑤	225	第 390 图	9 次出土遺物⑫	266
第 341 图	8 次調査区遺構配置図	226	第 391 图	全体一括遺物①	269
第 342 图	8 次溝土層図	227	第 392 图	全体一括遺物②	270
第 343 图	8 次溝	228	第 393 图	雄城台遺跡出土土器編年図	287
第 344 图	8 次溝出土遺物①	229	第 394 图	雄城台遺跡Ⅱ期、Ⅲ期の遺構	289
第 345 图	8 次溝出土遺物②	230	第 395 图	粗製甕	293
第 346 图	8 次溝出土遺物③	231	第 396 图	土器片加工品	294
第 347 图	8 次溝出土遺物④	232	第 397 图	花卉型住居	295
第 348 图	8 次溝出土遺物⑤	233	第 398 图	8 本主柱住居	296

第 399 図	鹿道原遺跡の掘立柱建物	296
第 400 図	東九州の環濠集落	297
第 401 図	木棺墓	298
第 402 図	東九州の社会構造想定模式図	300
第 403 図	大分平野の弥生時代遺跡	306
第 404 図	大野川流域及び久住山麓の弥生時代遺跡	307
第 405 図	雄城台の地形と出土の鏡	316
第 406 図	弥生時代における地域概念図	320

## 表目次

第 1 表	周辺の遺跡一覧表	2
第 2 表～第 5 表	弥生時代遺跡一覧表 1)～(4)	308～311
第 6 表	大分県内弥生時代出土鏡一覧表	319
第 7 表～第 10 表	遺構一覧表	321～324
第 11 表～第 33 表	遺物一覧表	325～345

## 写真図版

図版 1～図版 2	第 1 次調査
図版 3～図版 6	第 2 次調査
図版 7～図版 10	第 3 次調査
図版 11～図版 18	第 4 次調査
図版 19～図版 25	第 5 次調査
図版 26～図版 31	第 6 次調査
図版 32～図版 47	第 7 次調査
図版 48～図版 52	第 8 次調査
図版 53～図版 60	第 9 次調査
図版 61～図版 69	出土遺物

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯と調査の経過

大分市玉沢にある雄城台と呼ばれる台地は、昭和41年に富来隆氏(当時大分大学助教授)によって弥生土器の「土器窯」の出土が報告され、別府大学もトレンチ調査を行うなど、弥生時代の良好な遺跡として知られていた。この場所は「大分県農業試験場」の桑畑であったが、生徒数の増加によって昭和46年に県立高校が建設される計画が持ち上がり、同年第1次の調査(予備調査)が行われた。

第1次調査 昭和46年7月8日から7月21日(予備調査)

第2次調査 昭和47年7月17日から7月30日。指導 渡辺澄夫、賀川光夫、小田富士雄 文化課 橋本操六、後藤正二、後藤宗俊、清水宗昭、真野和夫(予備調査)。

以上の予備調査により、遺跡の保存状況が判明。そして、遺構所在地は造成段階で削平しないこととした。校舎については、年次計画に従い記録保存とすることとした。(7次調査実施要項添付の参考資料より)

第3次調査 昭和47年9月。担当は後藤、清水、小倉。普通教室棟500mの内、遺跡所在地215mを調査。

第4次調査 昭和48年3月から4月。担当は後藤、清水、渋谷、真野。体育館予定地1,600mの内、遺跡所在地640mを調査。

第5次調査 昭和48年5月から6月。担当は後藤、清水、渋谷、橋爪。特別教室棟800mの内、遺跡所在地347mを調査。

第6次調査 昭和49年4月から5月。担当は(前半)清水、坂本、(後半)清水、橋爪、藤田。普通教室棟500mの内、遺跡所在地386mを2回に分けて調査。

第7次調査 昭和49年11月から昭和50年1月。担当は清水、藤田、橋爪。

第8次調査 昭和61年12月2日から62年1月31日。担当は後藤、清水、高橋信武、西哲弘。

第9次調査 平成6年4月18日から7月29日。担当は小林昭彦。

### 第2節 遺跡の立地と環境

#### (1) 地理的環境

「雄城台」は、大分川とその支流の七瀬川に挟まれた宗方の低丘陵が東側に突き出た、西側を除く三方が急斜面をなす台地地形をなしている。七瀬川がつくる沖積平野との比高差は約53mあり、三角点の標高は67.2mである。唯一丘陵と繋がる西側も谷が北側から入っており、「雄城台」は独立丘陵の様相を呈している。台地上面は、過去の桑畑の開墾やその後の雄城台高校の立地のため微地形は失われたが、僅かな傾斜や小さな谷が入り込むなど、複雑な景観を呈していたことが予想される。特に9次調査区はそのような谷地形の残った部分にあたる。台地上面は、1区から7区、さらには8区でも遺構の上面が削平されているものがあるとは言え、大きく掘削はされていないと考えられる。

もう少し広い範囲で見ると、由布岳南西麓に源を発する大分川がとその支流である七瀬川が、狭い峡谷状の谷間を抜けて、段丘を作りながらやや広い谷底平野を形成し始める地点が「雄城台」を含む宗方の丘陵を挟む平野部になる。つまり、「雄城台」は大分川河口部に広がる沖積平野と峡谷部の中間地点にあたるともいえる。

なお、雄城台遺跡を取り巻く沖積地の旧微地形の復元については、高橋学「大分川・七瀬川流域平野の地形環境分析」(「玉沢地区条里跡第8次発掘調査報告」大分市教育委員会 2005)において詳述されているので参照願いたい。

#### (2) 歴史的環境

雄城台遺跡周辺では旧石器時代から縄文時代の遺跡はほとんど確認されていない。しかしながら、雄城台遺跡の発掘調査では僅かではあるが縄文時代の土器や石器が確認されているので、台地上で何らかの活動が行われていたことは確かである。

弥生時代になると、雄城台遺跡を取り巻く平野部で早期の遺物が出土ようになる。穂田市遺跡では近年早期後半に位置づけられる「下黒野式」の埋裏などが出土しており、さらに玉沢地区条里跡第7次調査区からは早期前

半の土器も出土するなど、平野部での活発な活動が窺われる。まだ遺構は確認されていないが、小規模な水田が展開していたとしてもおかしくはない。前期中頃には同じく7次調査区で水路の井堰が検出されており、この段階からは水田稲作が確実に行われていることがわかる。この平野部の低湿地を利用した水田は弥生時代後期まで行われる。

その後、弥生時代終末になると、穂田市遺跡で大規模な水路が築かれる(SD1)。おそらくこの段階で七瀬川の井堰灌漑が行われるようになったと考えられる。この状況は古墳時代中期に新たに掘り直され(SR1)、7世紀まで継続する水路に引き継がれる。穂田市遺跡の downstream に当たる穂田条里遺跡 E 区や F 区で古墳時代後期の水田跡が確認されているのも、この水路による灌漑によって築かれたものであろう。古墳時代前期には玉沢地区条里跡や穂田条里遺跡で確認された堅穴建物は姿を消し、段丘下の扇状地などのやや高い地点に立地するようになる(北の後遺跡や六反田遺跡など)。これも、大規模な灌漑水路による水田の面的な拡大が要因といえよう。一方で、取水口に近い穂田市遺跡で古墳時代中期の集落が確認されているのは、水田化の及ばなかった場所であったことに加え、井堰の管理などの意味もあったのかもしれない。

この大規模な水田を望む北側の丘陵各所には古墳が点在する。中でも、平野部の最も上流側(西側)の丘陵上には中期古墳である御陵古墳(前方後円墳)が築かれている。全長75m以上の規模で、主体部は箱式石棺と想定される。立地から考えても、平野部での大規模な水田経営と密接な関係を有していたことは間違いないだろう。

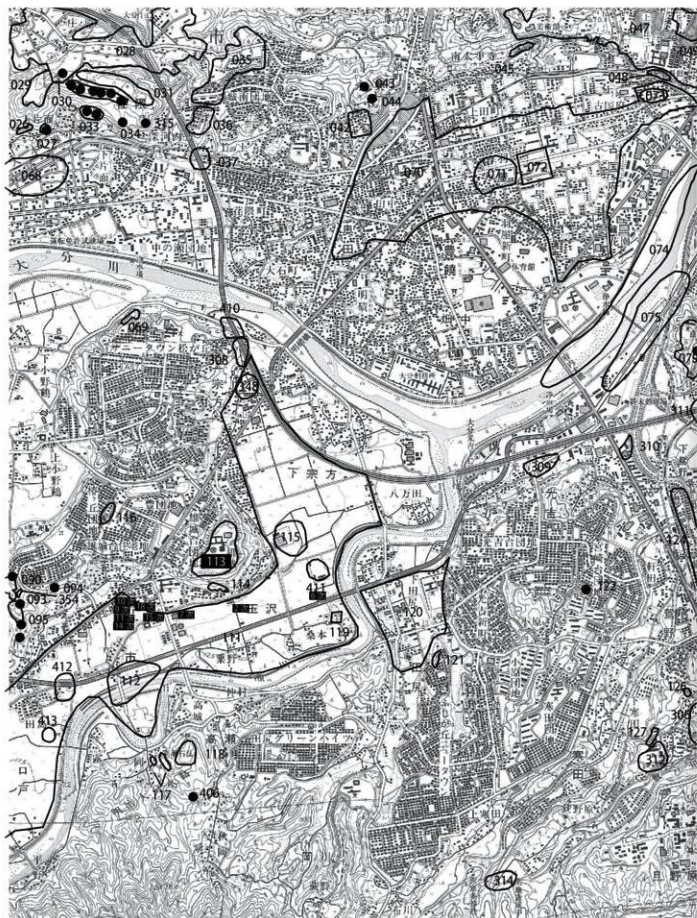
このように、穂田地区は弥生時代末から古墳時代後期にかけて安定した河川灌漑をおこない、前方後円墳被葬者を頂点とした社会を形成していた。そして、古代になると、穂田地区には条里が施工される。御陵古墳の築かれた丘陵の先端部に取水口を持つ「古井路」による灌漑である。玉沢地区条里跡第9次調査では、SF100とする9世紀以前に遡る畦畔が、現在残る条里地割りと一致する地点で確認されている。この段階で平野部全面に条里が施工されているのかはわからないが、古井路の開削伝承である建久3年(1192)以前に、別の水路による条里水田が作られていたであろう。古墳時代後期まで大規模な水田が作られていた可能性が高い地区であるので、条里水田の導入も早くに行われていたのかもしれない。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	内容
026	上片面横穴墓群	古墳	横穴墓
027	丑殿古墳	古墳	横穴式石室墳
028	庄ノ原遺跡	旧石器ほか	包蔵地
029	庄ノ原片面遺跡	縄文	包蔵地
030	蓬萊山古墳	古墳	前方後円墳
031	田崎遺跡	弥生・古墳	包蔵地
033	万寿山古墳群	古墳	古墳
034	深河内古墳	古墳	古墳
035	城南遺跡	弥生ほか	集落ほか
037	亀甲古墳	古墳	古墳
042	水洲遺跡	古代	寺院跡
043	千人塚	古墳	古墳
044	弘法穴古墳	古墳	横穴式石室墳
045	南太平寺横穴墓群	古墳	横穴墓
047	上野遺跡群	弥生ほか	集落ほか
048	岩屋寺横穴墓群	古墳	横穴墓
049	上野館跡	中世	大友氏館跡(上原館)
068	上片面遺跡	縄文	包蔵地
069	小野崎横穴墓群	古墳	横穴墓
070	古岡府遺跡群	古墳~中世	集落・国衙推定地
071	羽屋岡遺跡	古墳・古代	集落・国衙推定地
072	金剛宝成寺跡	古代	寺院
074	大分河川敷1遺跡	縄文・弥生	包蔵地
075	大分河川敷2遺跡	縄文・弥生	包蔵地
079	守岡遺跡	弥生・古墳・中世	集落・館跡
090	六部塚古墳	古墳	古墳
093	虎御前古墳	古墳	古墳
094	下迫古墳	古墳	古墳
095	高栗山横穴墓群	古墳	横穴墓
111	玉沢地区条里跡	弥生・古代ほか	条里跡

番号	遺跡名	時期	内容
112	穂田市遺跡	弥生・古墳ほか	集落、水路
113	雄城台遺跡	弥生・古墳	集落
114	雄城台下横穴墓群	古墳	横穴墓
115	深町遺跡	弥生	溝
116	柳ノ丘横穴墓群	古墳	横穴墓
117	高瀬横穴墓群	古墳	横穴墓
118	高城山城跡	中世	山城
119	委本館跡	中世	館跡
120	下田民地区条里跡	古墳・古代	条里跡
121	東山田横穴墓群	古墳	横穴墓
122	千人塚古墳	古墳	古墳
124	鷲野遺跡	弥生	集落
126	敷戸善原伝	南北朝	磨崖仏
127	大久保横穴墓群	古墳	横穴墓
306	敷戸城津留遺跡	中世	館跡
308	北ノ後遺跡	古墳	集落
309	光古遺跡	近世	包蔵地
310	宮崎遺跡	近世	包蔵地
311	曲遺跡	弥生・中世・近世	集落・包蔵地
312	下栗田遺跡	縄文~近世	集落・包蔵地
314	且野原神原遺跡	縄文・古墳	集落・包蔵地
315	深河内2号古墳	古墳	古墳
348	乙院遺跡	中世	館跡
354	高栗山第2横穴墓群	古墳	横穴墓
406	高瀬古墳	古墳	古墳
410	男性遺跡	近世	包蔵地
411	穂田平石遺跡	弥生	包蔵地
412	ガラランジ遺跡	弥生・中世・近世	集落
413	茨川原近世墓	近世	墓





五沢地区東里跡（111）の次数は、調査を行った凡その場所を示す

第1図 周辺遺跡位置図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

雄城台遺跡の第1次から7次調査にかけては、大分県における埋蔵文化財行政黎明期の発掘調査として、研究史的に重要な位置づけがなされる。この段階では、同じく県立高校の建設に伴って宇佐市の台の原遺跡が調査されており、豊前南部の台の原遺跡と、豊後中部の雄城台遺跡という弥生時代の拠点的な集落遺跡が調査されたことは、大分県の弥生時代を理解する上でも重要な出来事であったといえる。

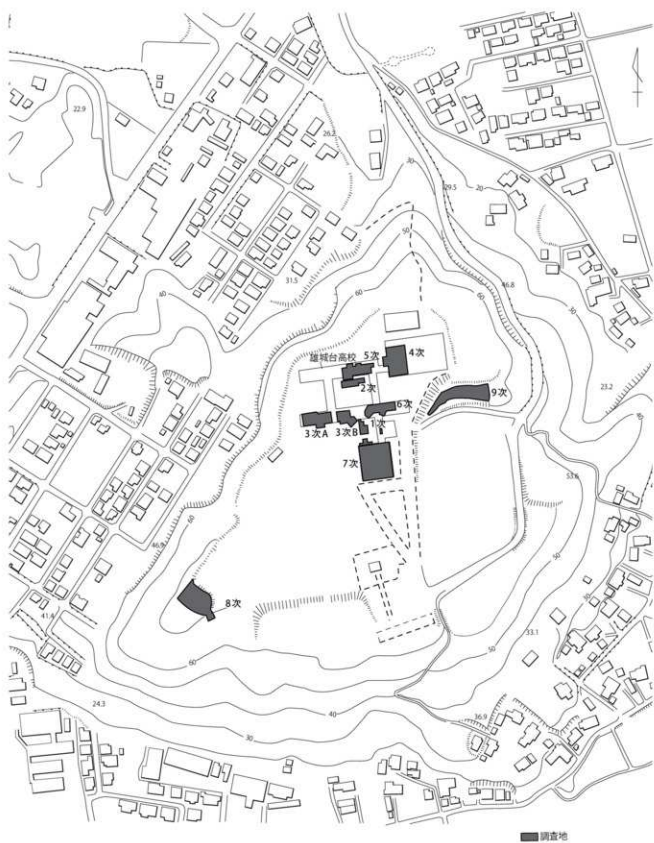
さて、現在の埋蔵文化財行政のレベル（行政的、学術的にも）で当初（第1次から7次）の発掘調査の成果を改めて整理してみると、遺構図中に標高が明示されていないものが多いなどシステマチックでなかったがために不十分な点が確かにあるが、ほとんど初めてといって良い（当時としては）大規模な調査によって、初めて明るみにでた弥生時代の集落と、鏡片や土器などの遺物について、当時の調査員たちが感嘆しながら発掘調査にあたったことが残された図面や写真からありありと感じられる。

おそらく、その後の第8次、9次調査の成果を見てもわかるように、弥生時代の遺跡は台地全面に展開していたと見るべきであろう。そのため、台地のほぼ中央に位置する第1次から7次の調査成果は、弥生時代集落の中央付近の様相を示していると考えて良いだろう。いずれの調査区からも堅穴建物と土坑（多くは貯蔵穴）が検出されているが、特に第7次の東側には堅穴建物が無く、土坑が円を描くように並んでいるように見える。しかしながら、部分的な調査のため、全体の中における位置づけは不明と言わざるをえない。

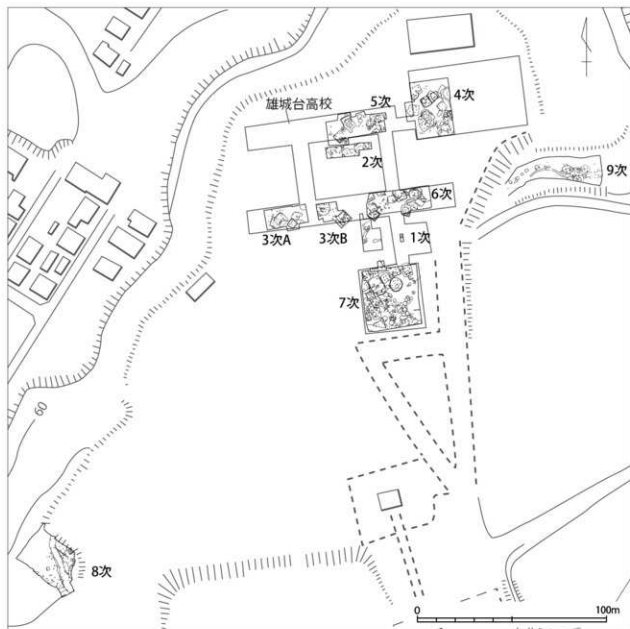
また、第8次調査では台地の縁辺部に、弥生時代後期後葉から終末にかけての土器が大量に廃棄された溝が確認された。第7次でも同規模の溝が検出されたが、いずれもその延長については調査区内で確認できていない。そのため、雄城台遺跡の弥生時代集落が環濠を持つのか否か、については確証が得られていない。

9次にわたる調査の結果、堅穴建物104基、掘立柱建物1基、土坑105基などが確認された。

なお、各調査区の遺構説明の中で触れる時期については、第4章第1節で示した編年案による。



第2図 調査区位置図 (1/4,000)

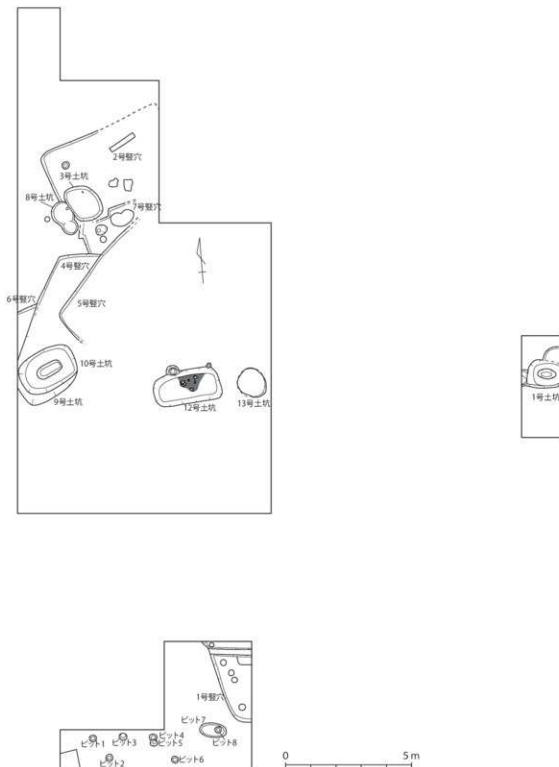


第3図 全体遺構配置図 (1/2,000)

## 第2節 第1次調査

## (1) 調査の概要 (第4図)

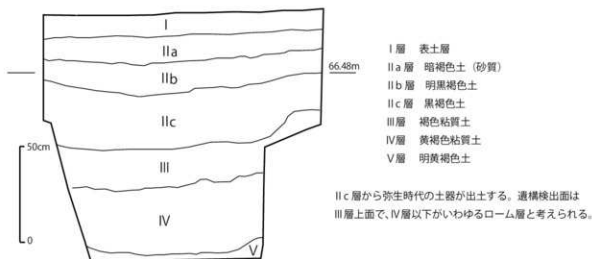
台地のほぼ中央部、約229mを調査した。調査区は北側の規模の大きな調査区と、南側と東側の小さな調査区に分かれている。検出された遺構は堅穴建物6基と土坑6基である。遺構は上部を大きく削平されており、特に南東部は遺構の残りがよくない。



第4図 1次調査区遺構配置図

## (2) 基本層序 (第5図)

調査区内の壁際を掘り下げて、層序を確認した。その結果、I層からV層まで確認した。I層は表土層（耕作土）で、調査時に除去していた。II層はa、b、cの三層に分層できる。II a層は砂質の暗褐色土、II b層は明黒褐色土、II c層は黒褐色土、III層は粘質の強い褐色土、IV層は粘質の強い黄褐色土、V層は明黄褐色土である。この中で、特にII c層から弥生時代中、後期の遺物が出土している。



第5図 基本層序

## (3) 遺構と遺物

## 竪穴建物

## 1) 1号竪穴建物 (第6図)

南側の小さな調査区で確認された竪穴建物で、一辺の大部分が検出されたばかりは調査区外に広がっている。一辺の長さは3.5(+a)mである。柱穴は4か所で確認されたが、主柱穴はわからなかった。炬も確認できなかった。北側は一部後世の溝によって削られている。

図化できる遺物は出土しなかったが、竪穴プランが方形を示すと考えられるので、弥生時代後期以降と考えられる。

## 2) 2号竪穴建物 (第7図)

北側の大きな調査区の北側で確認された竪穴建物であるが、東側半分は削平を受け、壁が残っていない。南北の大きさは3.1(+a)mである。柱穴は3か所で確認されたが、主柱穴は確認できなかった。炬も確認できなかった。

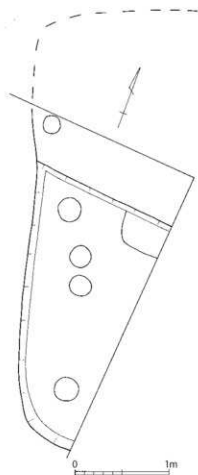
図示できる出土遺物は9点で、第8図1から3は複合口縁をなす壺(安国寺式壺形土器)である。口縁部上半がよく伸び、頸部の突帯がネクタイ状に垂れるなど、弥生時代終末の特徴を示す。4と5は壺の底部であるが、古い時期の混ざり込みである。6と7は甕である。8は口縁部が直立する小型の壺、9は高坏の脚部である。

これらの特徴から、この建物の時期はIX期(弥生時代終末)である。

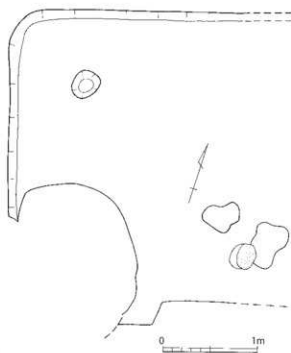
## 3) 4号竪穴建物 (第9図)

北側の大きな調査区の中央で確認された竪穴建物であるが、大部分5号竪穴建物に削られていることや、周囲の削平により、北西コーナー部分しか壁が残っていない。柱穴は確認できなかった。炬も確認できなかった。

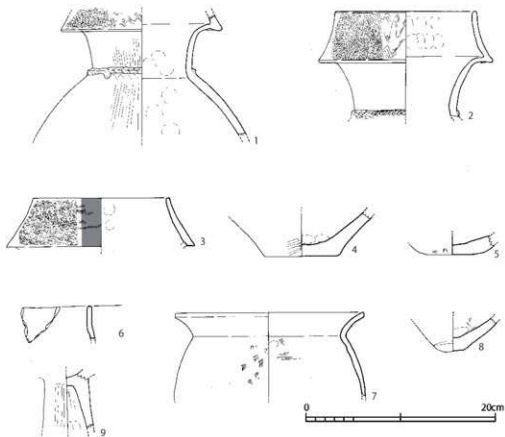
図示できる出土遺物は12点である。第10図10は安国寺式土器壺の肩部突帯で、突帯下部に勾玉状の浮文を並べる。11と12は壺の底部で、



第6図 1次1号竪穴建物



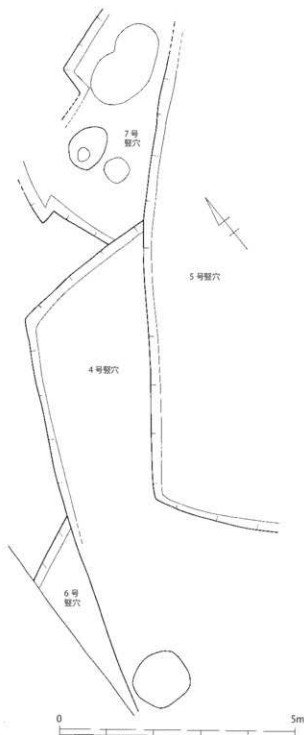
第7図 1次2号竪穴建物



第8図 1次2号竪穴建物出土遺物

平底である。13から20は甕で、16は下城式土器甕で、口縁部やや下に一条の刻目突帯を廻らせる。17から20は平底の底部。21は甕と思われる。

竪穴建物の時期は、一部中期のものも混じるが、Ⅵ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第9図 1次4, 5, 6, 7号竪穴建物

## 4) 5号竪穴建物(第9図)

北側の大きな調査区の中央で確認された竪穴建物であるが、東側から南側にかけて削平を受けており、壁は北側の一边と南西コーナー付近しか残っていなかった。柱穴は確認できなかった。埴も確認できなかった。

図示できる出土遺物は17点である。第11図22と23は安国寺式土器壺の胴部で、断面三角形の突帯が三本廻る。24と25は壺の平底の底部。26から31は甕で、26、27は大きく外反する口縁部、28はやや上げ底の底部、29から31は上げ底の底部である。32と33は高坏、第12図34は支脚と思われるが、底部があり、別な器種かもしれない。35と36は土器片加工品。37は磨製石鏃、38は長さが25cm弱ある台石である。

平底と上げ底の甕底部から、この建物の時期はⅥ期(後期前葉)からⅦ期(後期中葉)と考えられる。

## 5) 6号竪穴建物(第9図)

北側の大きな調査区の中央西側で確認された竪穴建物であるが、大部分が調査区外に展開し、周囲も削平を受けていることから壁の一部しか確認できなかった。4号竪穴建物との切り合い関係も判然としない。埴も確認できなかった。

図示できる遺物は出土しなかったが、竪穴プランが直線的なため、弥生時代後期以降と考えられる。

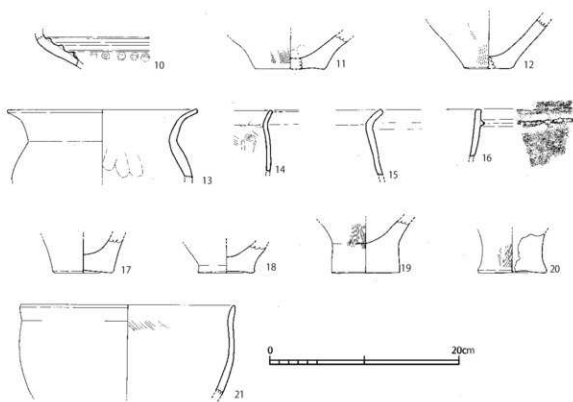
## 6) 7号竪穴建物(第9図)

北側の大きな調査区の北側で確認された竪穴建物であるが、4号と5号竪穴建物に切られており、全形は不明である。埴も確認できなかった。2号竪穴建物との切り合い関係ははっきりしなかったが、出土遺物を見る限りは2号竪穴建物に切っていたのであろう。

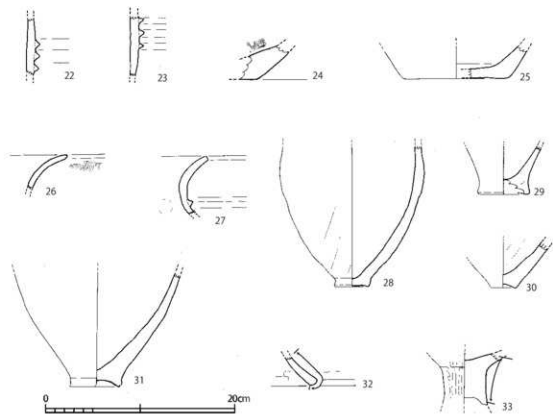
出土遺物は12点で、第13図39は外面に波状文を施す安国寺式土器の壺、40は内外面にベンガラを塗布する壺の口縁部、41は胴部に断面台形の突帯を廻らせる壺、42は口唇部に刺突文を持つ壺の口縁部で下城式土器の壺。43は口縁部下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、44は甕の平底底部。45はやや小ぶりの口縁部が「く」の字に折れる甕、46は短い直立気味の口縁部の壺、47は鉢の脚部か。48と49は高坏。49は半球形の坏部に大きく開く口縁部が付く。50は泥岩製の砥石である。

以上から、この竪穴建物の時期はⅥ期(後期前葉)と考えられる。

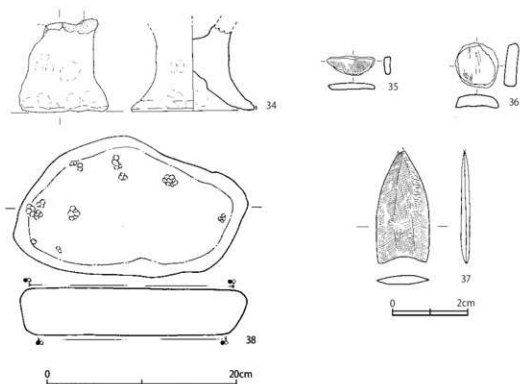




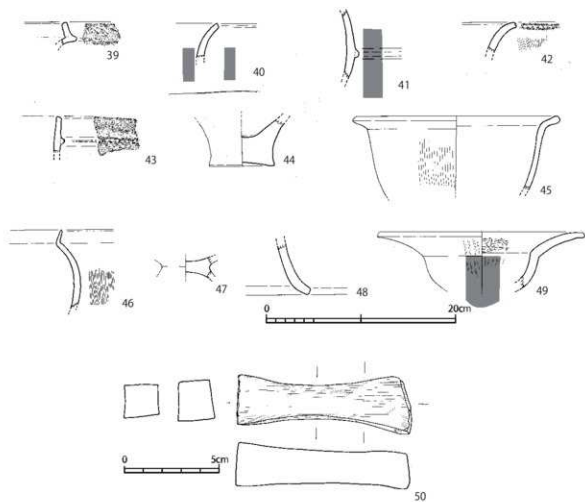
第10図 1次4号竪穴建物出土遺物



第11図 1次5号竪穴建物出土遺物①



第12図 1次5号竪穴建物出土遺物②



第13図 1次7号竪穴建物出土遺物

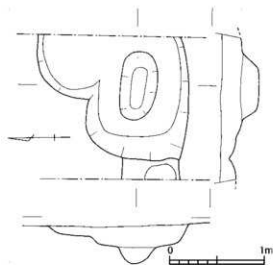
## 土坑

## 1) 1号土坑 (第14図)

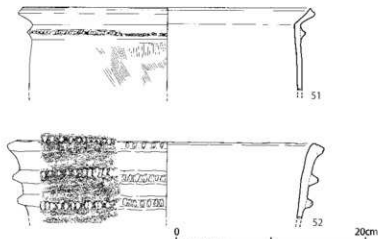
東側に離れた小さな調査区で確認された長楕円形の土坑である。東側は調査区外に伸びるので全形は不明である。長軸  $1.3(+a)$  m、短軸 1.1m、深さ 0.2m である。床面には  $0.7\text{m} \times 0.38\text{m}$ 、深さ 0.16m のピットがある。また、北側は浅い別の遺構に切られている。

図示できた出土遺物は2点である。第15図51は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕で、口縁下に一条の三角突帯が廻る。52は口唇部とその下に二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器の甕である。

以上から、この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



第14図 1次1号土坑



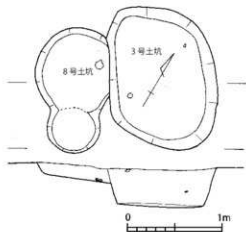
第15図 1次1号土坑出土遺物

## 2) 3号土坑 (第16図)

北側の大きな調査区の北よりで確認された土坑で、8号土坑を切り、2号堅穴建物に切られている。長軸 1.5m、短軸 1.15m、深さ 0.4m の隅丸長方形の土坑である。

出土遺物は7点である。第17図53は口縁部が勳先状をなす壺の口縁部、54は平底の壺底部、55は断面台形の突帯が廻る壺胴部、56は口縁端部をやや摘み上げる甕、57は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。58は磨製石剣、59は茎のない鉄鎌である。

以上から、この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。

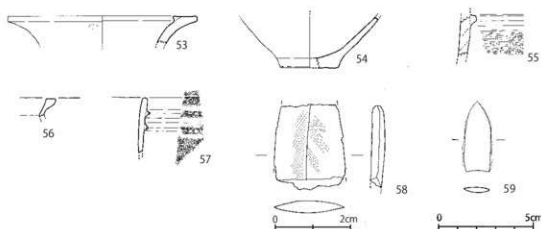


第16図 1次3, 8号土坑

## 3) 9号土坑 (第19図)

北側の大きな調査区の南よりで確認された土坑で、10号土坑に重なる形で切っている。

図示できる遺物は1点で、第18図60は頸部に二条の突帯が廻る安国寺式土器壺である。土器の時期はⅦ期（後期中葉）前後に位置づけられる。



第17図 1次3号土坑出土遺物

## 4) 10号土坑 (第19図)

北側の大きな調査区の南寄りの西壁際で確認された土坑で、長軸2.3m、短軸1.6m、深さ0.55mの長楕円を呈する。底面には1.0m×0.5m、深さ0.24mの長楕円形の穴がある。9号土坑から切られているが、9号土坑が浅いため、ほぼ全体が残されている。

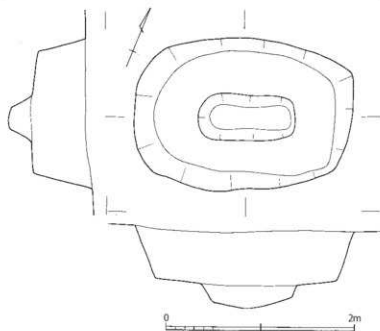
図示できる出土遺物は15点である。第20図61は頸部に刺突文を持つ一条の突帯を廻らせる壺、62は断面台形から三角形の突帯を二条廻らせる壺胴部、63と64は平底の遊底部である。65は口縁端部を

積み上げる東北部九州系の甕、66は口縁部が逆し字状に大きく伸びる甕、67は口縁部が鐮先状をなす大型の甕、68と69は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、68は口縁部下と胴部突帯の間を縦の刻目突帯で結ぶ。70から72は甕、73は鉢。74は姫島産黒曜石製の打製石鎌、75は安山岩製の凹石。

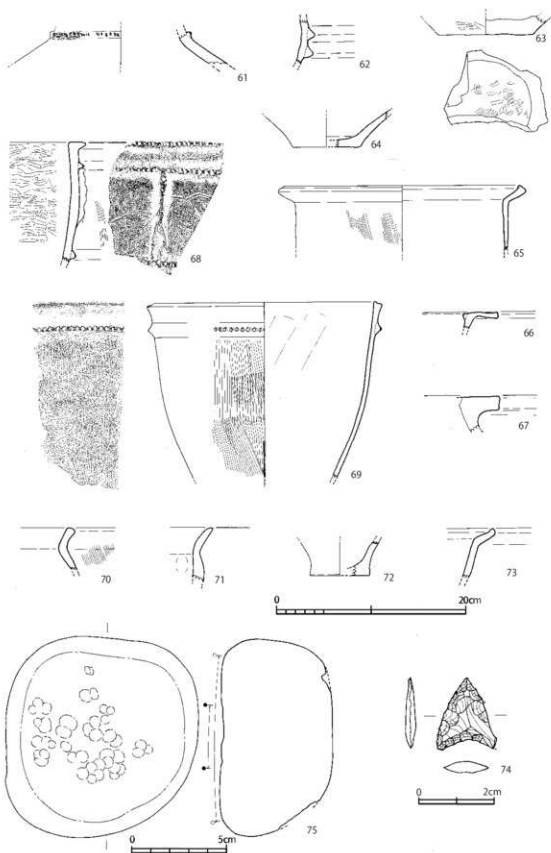
以上から、この土坑の時期はⅢ期(中期中頃)と考えられる。



第18図 1次9号土坑出土遺物



第19図 1次10号土坑



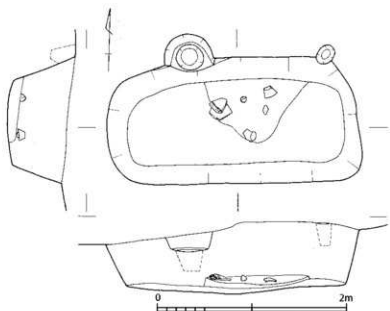
第20图 1次10号土坑出土遺物

## 5) 12号土坑 (第21図)

北側の大きな調査区の南寄りのほぼ中央で確認された土坑で、長軸2.63m、短軸1.3m、深さ0.72mの長方形を呈する。北側の中央壁際の床には灰が堆積していた。遺物は主にその灰層の上から出土している。

図示できる遺物は5点である。第22図76は口縁部が緩やかに外反しながら開く単口縁の壺、77はやや厚手で、小さく開く甕の口縁部、78は口縁端部が積み上げられる甕、79は底部がわずかに上げ底状を呈する甕底部、80は安山岩製の敲石である。

以上から、中期の遺物も含むものの、76の時期を考慮してこの土坑の時期はⅨ期(終末)と考えられる。

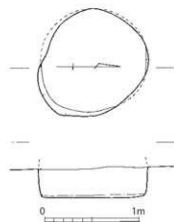


第21図 1次12号土坑

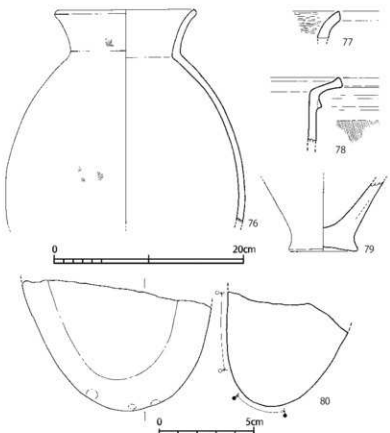
## 6) 13号土坑 (第23図)

12号土坑のすぐ東側にある直径1.12m、深さ31mの円形の土坑である。図示できる出土物はなかったが、細片では弥生時代中期の土器が出土している。また、堆積土中からは、多くの小礫とともに炭化米が出土している。

おそらく弥生時代中期に属す、断面袋状を呈す円形の貯蔵穴であろう。



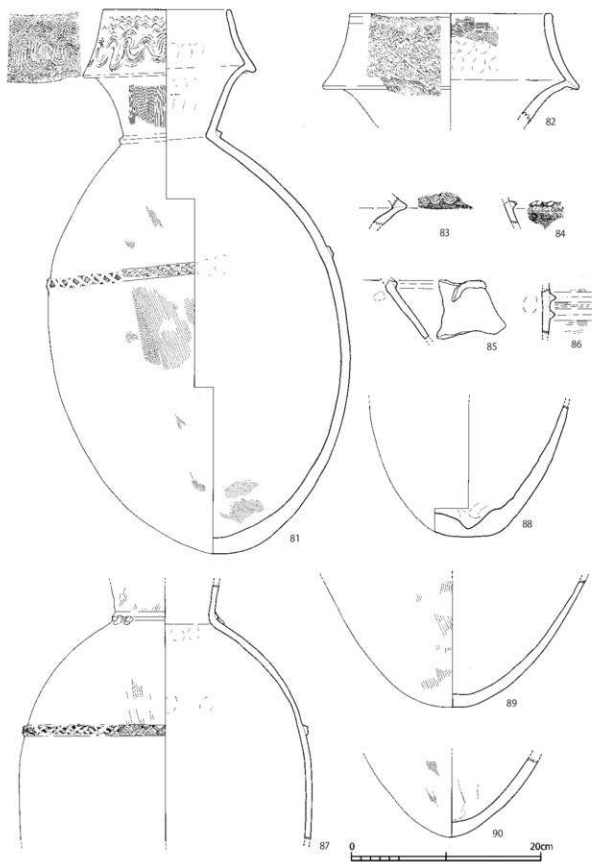
第23図 1次13号土坑



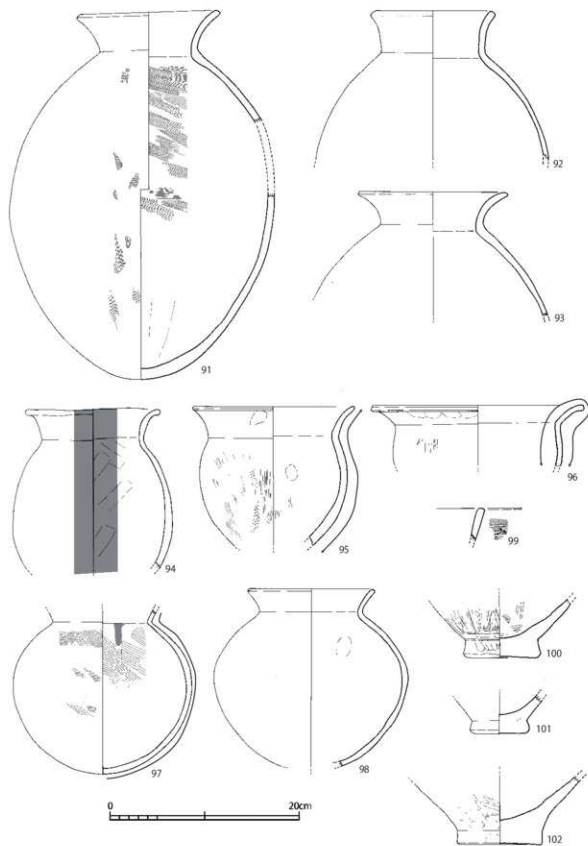
第22図 1次12号土坑出土遺物

## (4) その他の遺物

ここでは、1次調査において主に表土や攪乱層中から出土した遺物を説明する。第24図81から90は安国寺式土器壺である。複合口縁部の上半が大きく伸び(81,83)、胴部突帯は断面が扁平な台形で(81,82)、底部は丸底(89,90)であることから、大部分はⅨ期の所産である。第25図91から93は口縁部が緩やかに外反しながら開く壺で、91が丸底であることから同じくⅨ期の所産か。94から98は小型の壺で、98以外はベンガラを塗布する。99は小型の壺の口縁部である。100から102は壺の底部で、いずれも平底をなす。

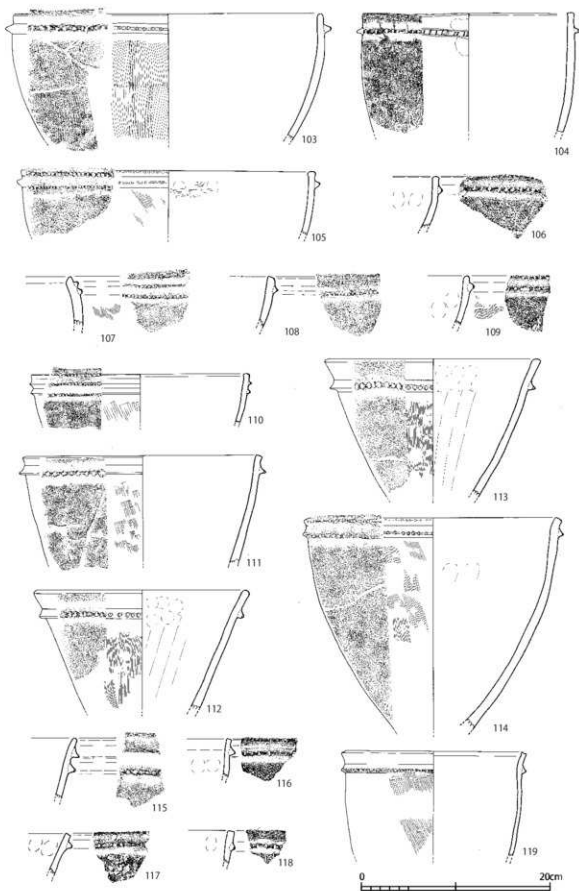


第24圖 1次一括遺物①

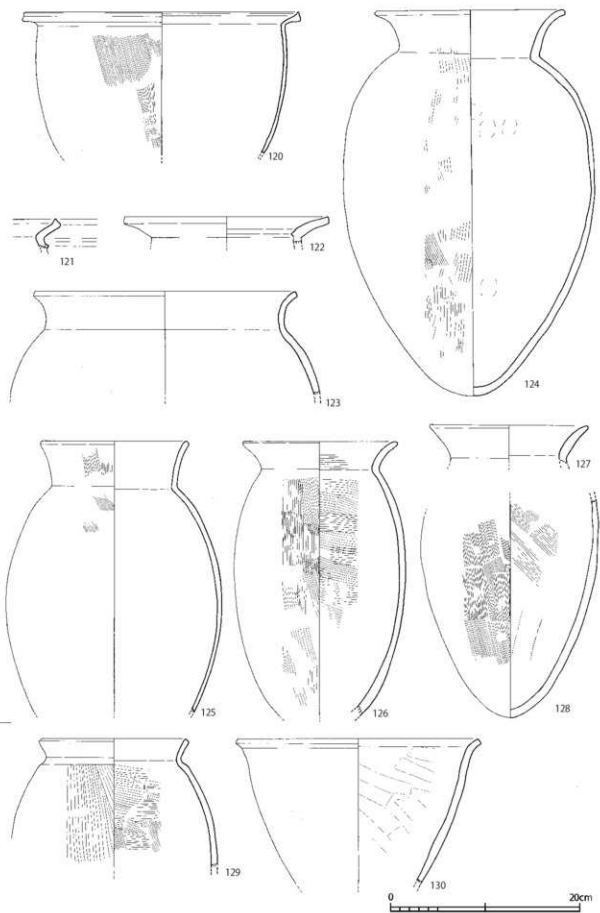


第25図 1次一括遺物②

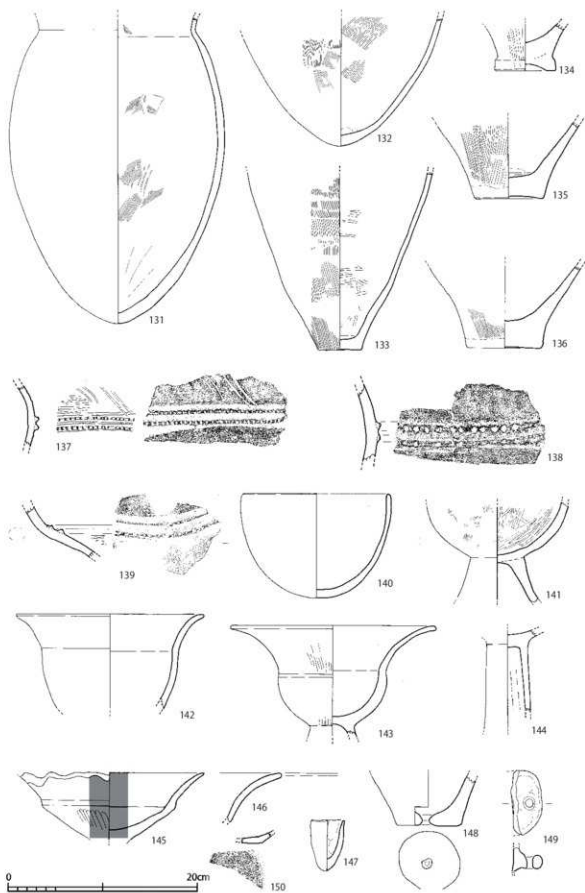




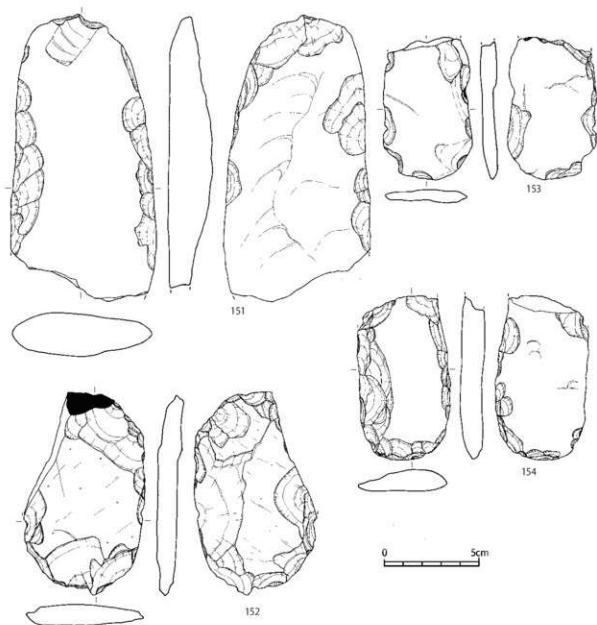
第26圖 1次一括遺物③



第27図 1次一括遺物④



第28圖 1次一括遺物⑤

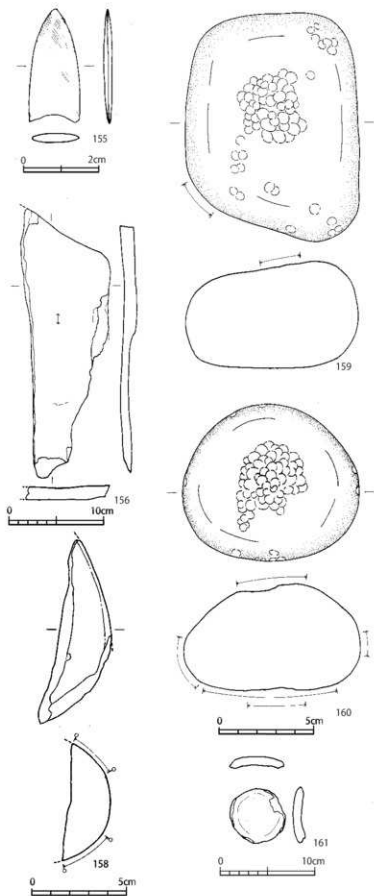


第29図 1次一括遺物⑥

第26図103から119は下城式土器の甕である。口縁部が内湾するもの(103から109)、口縁部が緩やかに折れて開くもの(114、119)が古く、直線的に開くものが新しいと考えられるが、遺構共存資料を見ると必ずしも時代の目安にはならない。しかし、突帯の位置が口縁直下のものが古く、新しいものが下がる傾向があるので、前者が内湾するものに多いことは、やはり時期差を示す可能性がある。

第27図120から130はその他の甕。120と121は口縁端部を小さく積み上げる東北部九州系の甕。124から126は口縁部がわずかに外反しながら開くもの、129は口縁部が「く」字に折れるもの、130は口縁端部で小さく折れて開くもので、この130と120、121は中期、その他は後期の所産である。

第28図131から136は甕で、丸底と平底がある。134は上げ底状を呈する。137と139は1期に属する甕で、肩部と胴部に小さな刻みを入れた突帯を廻らせる。138はⅣ期のみに見られる系譜不明の甕で、単口縁で胴部に二条一組の刻目突帯を廻らせるものと考えられる。137に比べ、刻目が大きい。140は丸底の鉢、141から143は脚付きの鉢、144から146は高坏である。147は長胴のミニチュア土器、148は瓶、149は取っ手である。150は中世の底部系切り土器器小皿である。



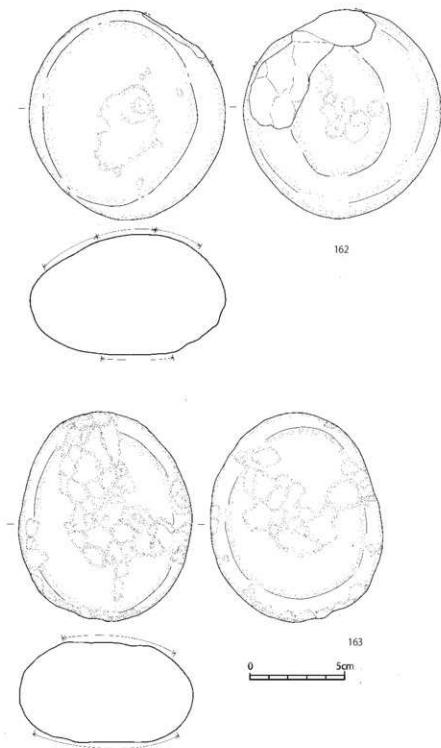
第30図 1次一括遺物⑦

第29図151から160及び第31図162、163は石器である。155は蛇紋岩製の磨製石鏃、156は緑泥片岩製の砥石、159と160は敲石、磨石、第29図151から154は打製石斧である。161は土器片加工品である。

#### (5) まとめ

1次調査は、「試掘調査」という位置づけであったことから、遺構の図面は通常作図するはずの20分の1縮尺図をいくつかの土坑を除いて作成していない。そのため、遺憾ながら遺構の深さといった重要な情報が欠落してしまっている。

しかしながら、この1次調査において台地のほぼ中央部に弥生時代の集落が広がっている可能性が確認できたことは、後の調査を進める上で貴重な成果であった。



第31図 1次一括遺物⑧

### 第3節 第2次調査

#### (1) 調査の概要 (第32図)

第1次調査区の北側で、台地の北部約126mを調査した。検出された遺構は竪穴建物3基である。なお、調査時に1号、2号とした落ち込みは遺構とは認められなかったので、除外している。

#### (2) 遺構と遺物

##### 竪穴建物

#### 1) 3号竪穴建物 (第33図)

調査区中央で確認された竪穴建物で、略南北5.0m、略東西5.2m (推定) のほぼ正方形を呈する。5号竪穴建物を切っており、4号竪穴建物との切り合い関係は不明である。上部は削平を受けており、壁はほとんど残っていない。床面には4か所に焼土の堆積があり、ほぼ中央の最も大きな部分が炉と考えられる。柱穴は東側の2本は確認できたが、西側は確認できていない。おそらく4本柱建物になるであろう。

図示できる出土遺物は10点である。第34図164から166は安国寺式土器甕で、164は頸部に一条の断面三角突帯を巡らす。165は口縁部上半に波状文を施す。166は頸部下の二条の突帯に勾玉状浮文が添付される。168と169は下城式土器甕で、168は二条の刻目突帯を巡らせる。170は小型の壺か。172と173は打製石鏃で、いずれもササカイト製、171は結晶片岩製の磨製石鏃である。

以上から、この竪穴の時期は縄期 (後期中葉) から縄期 (後期後葉) と考えられる。

#### 2) 4号竪穴建物 (第35図)

調査区中央で確認された竪穴建物で、南北4.5m、東西4.0mの長方形を呈する。深さのデータがなく、遺構ながら不明である。床面のほぼ中央に0.6m×0.5mの範囲が焼土化した部分があり、地床炉と考えられる。

図示できる出土遺物は4点である。第36図174は安国寺式土器甕で、口縁部上半に一条の飾描波状文がある。175は口縁部が「く」字形に大きく開く長胴の甕、176は脚付きの鉢と思われる。177は鉄製の鉞である。全長は11.7cmである。

以上から、この建物の時期は縄期 (後期中葉) から縄期 (後期後葉) と考えられる。

#### 3) 5号竪穴建物 (第37図)

調査区東側で確認された竪穴建物で、略東西方向で5.7m、南北方向は調査区外に伸びているため不明である。また、南西角部で3号竪穴建物を切っている。床面には3か所焼土が確認できたが、中央やや東寄りのものが炉跡であろう。また、ピットは数か所で確認されたが、明確な支柱穴は指摘できない。さらに、炉と考えられる焼土と壁の間に、直径1.4mの円形の土坑が確認されているが、この建物との関係は不明である。

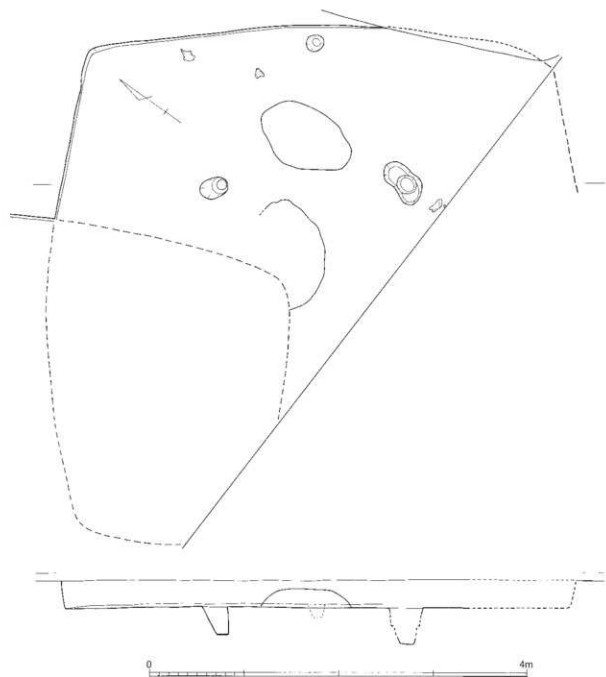
図示できる出土遺物は6点である。第38図178と179は甕で、178は緩やかに外反しながら開く口縁部で、179はわずかに上げ底を呈する底部。180は取っ手付きの鉢で、取っ手は大部分欠けているが、149のような形になる



第32図 2次区遺構配置図

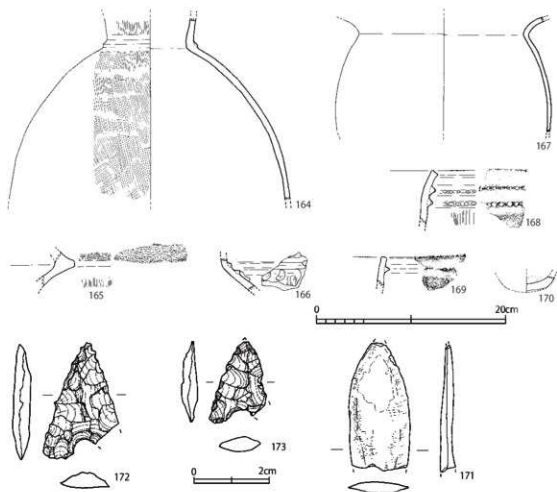
だろう。181は円盤状の底部からやや内湾しながら立ち上がる体部に、外反する口縁部が付く鉢。182は高坏か。183は碧玉製の管玉である。

以上からこの建物の時期は縄期（後期中葉）と考えられる。

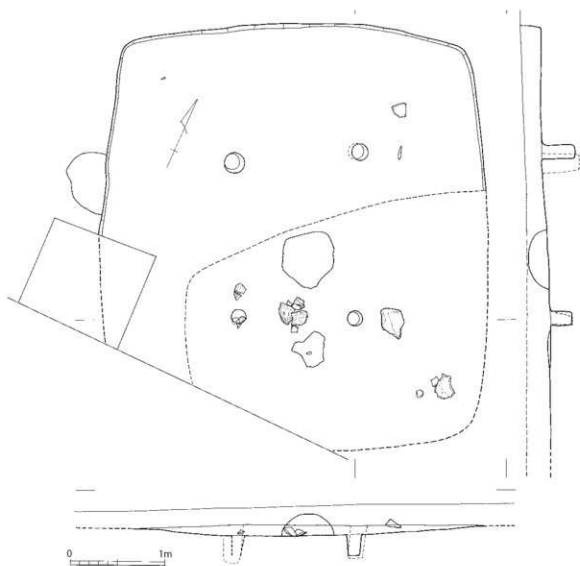


第33図 2次3号竪穴建物

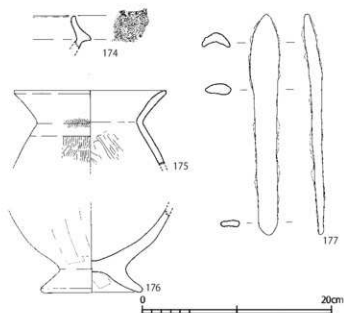




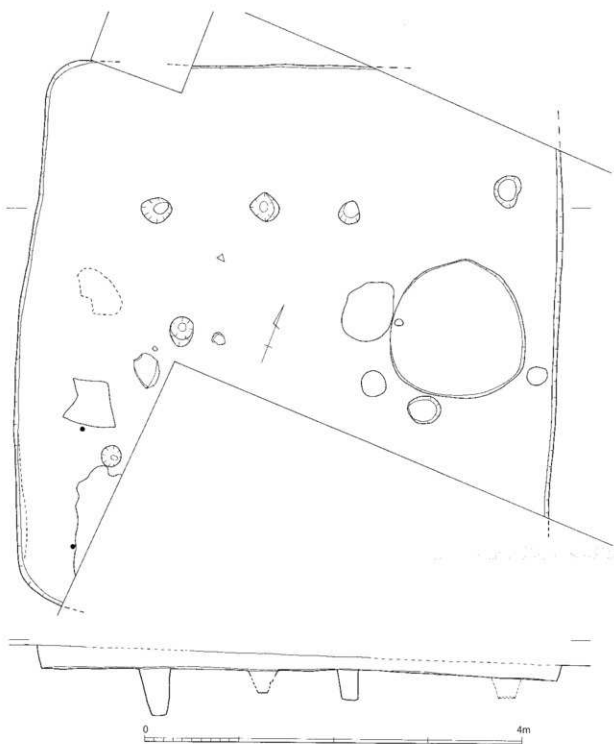
第34図 2次3号竪穴建物出土遺物



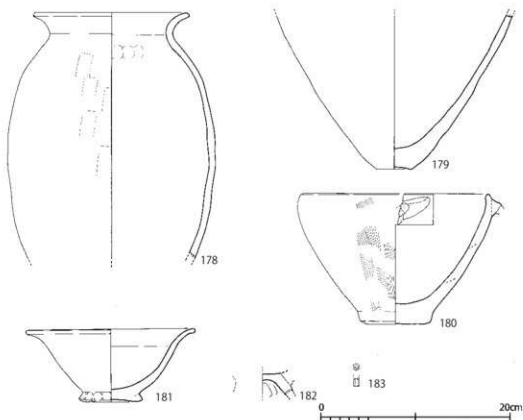
第35図 2次4号竪穴建物



第36図 2次4号竪穴建物出土遺物



第37図 2次5号竪穴建物



第38図 2次5号竪穴建物出土遺物

## (3) その他の遺物

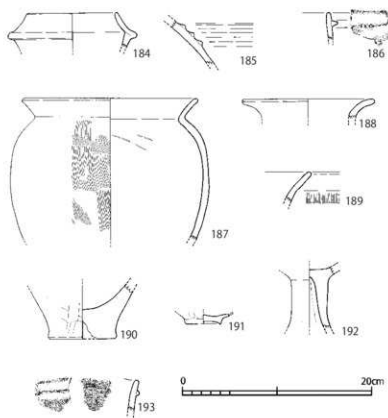
ここでは、調査で1号竪穴建物と2号竪穴建物とした落ち込みから出土したものであるが、最終的に遺構と確認できなかった土器(184から193)と、一括の土器群として取り上げられた資料(194から216)、さらに表土などから出土した一括資料(217から241)を扱う。

第39図184と185は安国寺式土器甕である。186は下城式土器甕、187から189は口縁部が「く」字形に開く甕、190と191は甕の底部である。191は上げ底状を呈する。192は高坏で、脚部は円柱状に伸びる。193は無刻目突帯を廻らせる縄文時代晩期の鉢。

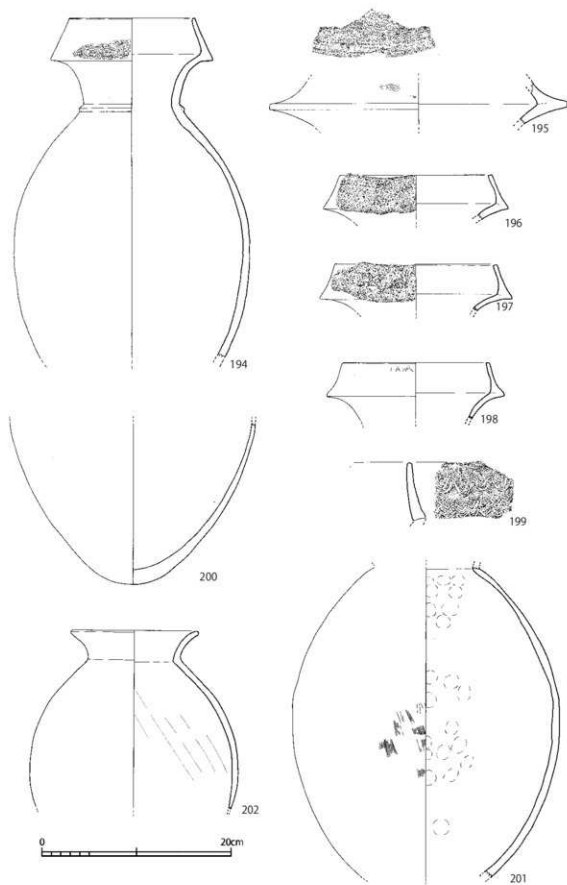
第40図194から200は安国寺式土器甕である。口縁部上半は比較的長く伸びる。底部(200)は丸底である。201も丸底になろう。202は単口縁の甕。203から212は甕である。203は逆L字形の口縁部を持つものでベンガラを塗布する。204から210は口縁部がやや外反しながら開くもので、210が球形を呈する以外は長胴である。211は下城式土器甕、212はやや平底気味の甕底部である。213は外面から口縁部内側までベンガラを塗布する小型の甕、214は頸部に穿孔のある小型の甕、215は裾部で大きく広がる高坏である。216は結晶片岩製の磨製石鏃である。

第42図217から221は安国寺式土器甕である。217と218は口縁部上半の伸びが著しくはない。220と221は扁平な刻目突帯を頸部に廻らせる。222から227は甕。222は下城式土器、223と224は東北部九州系の甕である。228と229は鉢、230も口縁部を緩やかに開く鉢か。231は脚付きの鉢、232と233は高坏である。234は土器片加工品、235は扁平な柄みを持つ須恵器坏蓋である。

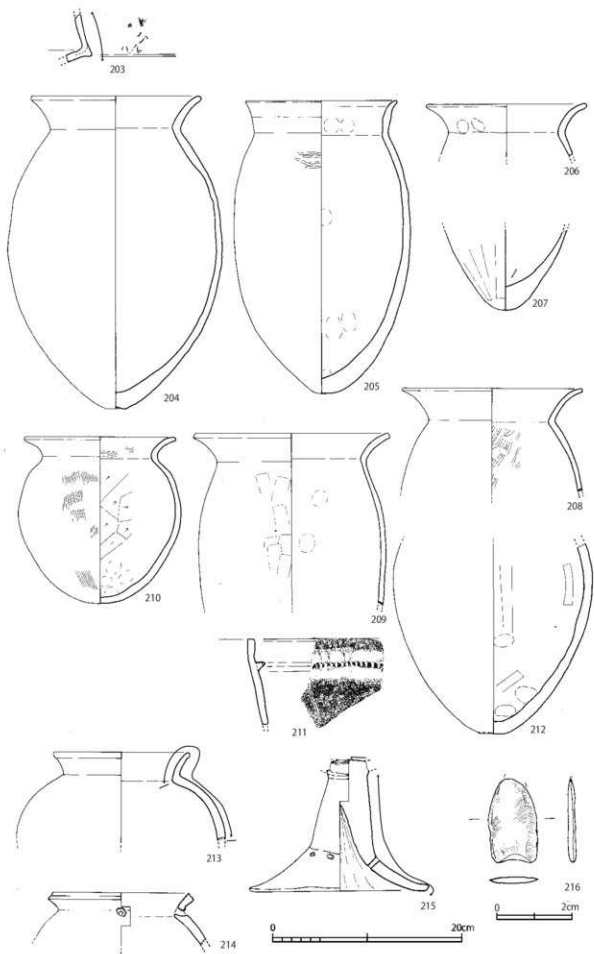
第43図236から241は石器である。236は安山岩製の打製石斧、237は緑色結晶片岩製の磨製石斧、238は結晶片岩製の磨製石鏃、239と240は碧玉製の管玉、241は安山岩製の磨石である。



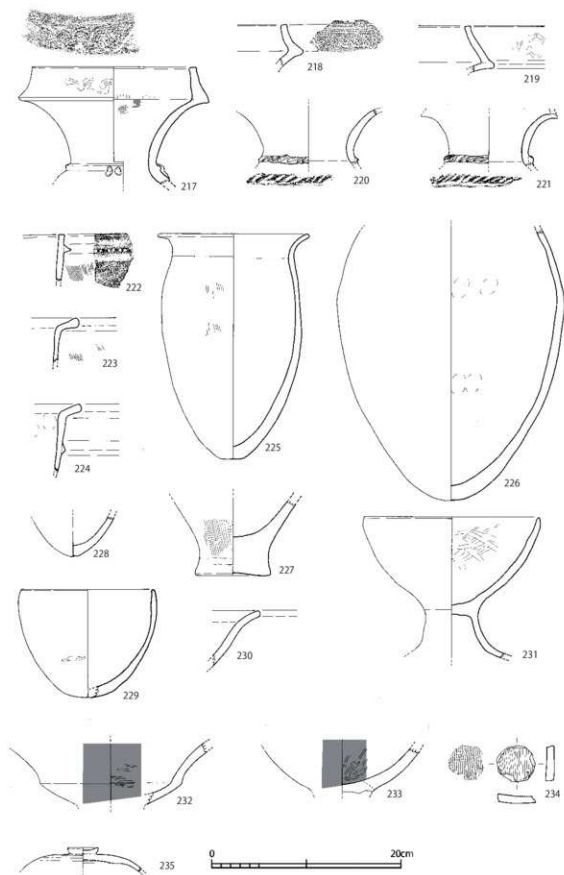
第39図 2次1,2号竪穴建物出土遺物



第40図 2次土器群遺物①

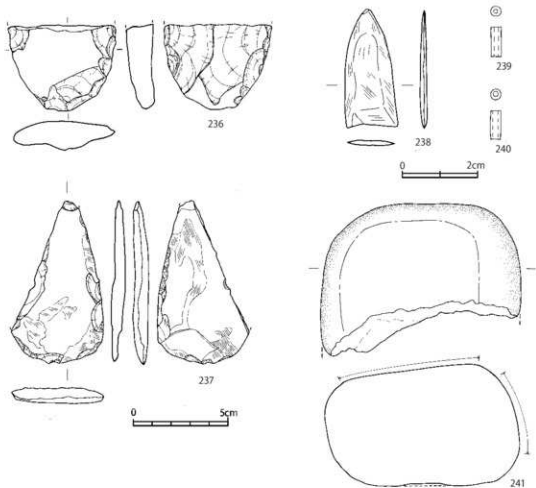


第41図 2次土器群遺物②



第42図 2次一括遺物①





第43図 2次一括遺物②

## (4) まとめ

1次調査同様予備調査という位置づけであったため、記録された情報が少なく、復元が十分に果たせなかったが、堅穴建物を3基確認できた。なお、報告では1号と2号が欠番となっているが、調査時には遺構と考えられていたものの、最終的には浅い落ち込みと判明したものである。

## 第4節 第3次調査

## (1) 調査の概要

台地の中央部やや西側、約215mを調査した。調査区は西側の調査区(3次A区)と、東側の調査区(3次B区)に分かれている。検出された遺構は竪穴建物のみで、A区で7基、B区で5基である。以下ではA区の遺構をA1号、B区の遺構をB2号などと記す。

## (2) 遺構と遺物

## 竪穴建物

## 1) A 1号竪穴建物(第45図)

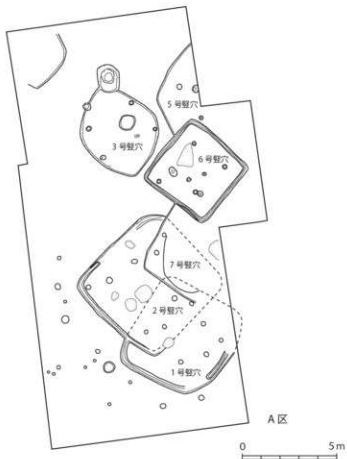
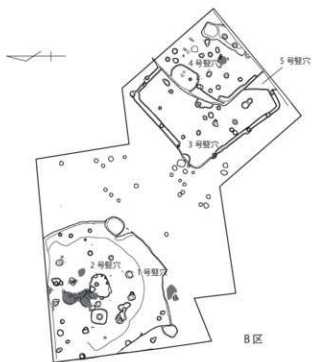
A 2号竪穴建物に切られており、全形はうかがい知れないが、幅15cm、深さ10cmほどの壁溝によって、一辺5.8m程度に復元が可能である。南側は削平を受け残っていないが、壁溝は多角形あるいは隅丸方形の形状を呈す。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴は不明である。炉跡も確認されなかった。

図示できる出土遺物は10点である。第46図242は口縁部下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、243は小型の壺または鉢の口縁部か。244は丸底を呈する鉢、245から247は高坏である。248と249は同型、同大の鉄製品であるが、刃は付けられておらず、鉄素材であろうか。250はチャート製の打製石鏃、251は蛇紋岩製の石鏃と考えられる。

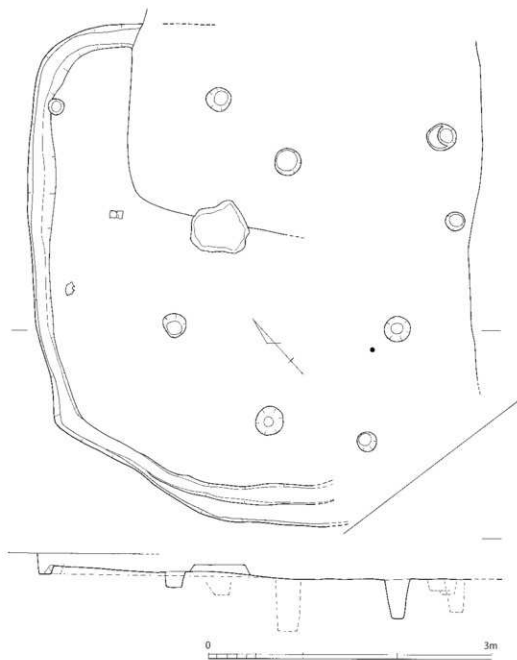
以上より、この建物の時期は高坏の形状からⅧ期(後期後葉)からⅨ期(終末)であると考えられる。

## 2) A 2号竪穴建物(第47図)

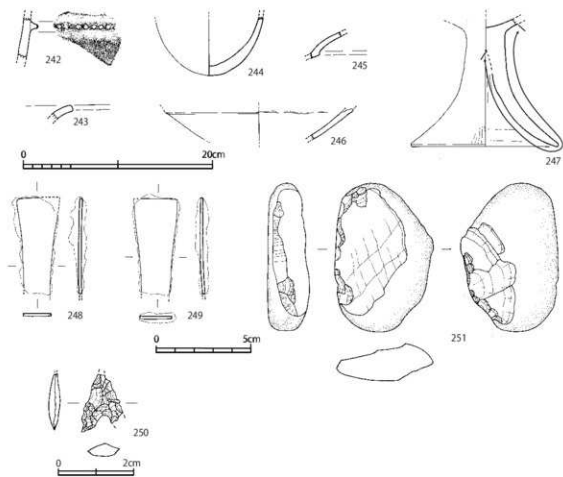
1号竪穴建物を切り、A 7号竪穴建物によって切られている一辺5.8mの正方形を呈する竪穴建物である。幅15cm、深さ5cmほどの壁溝が廻る。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴は不明である。床面には4カ所で焼土が確認されたが、中央のものが地床炉であろう。



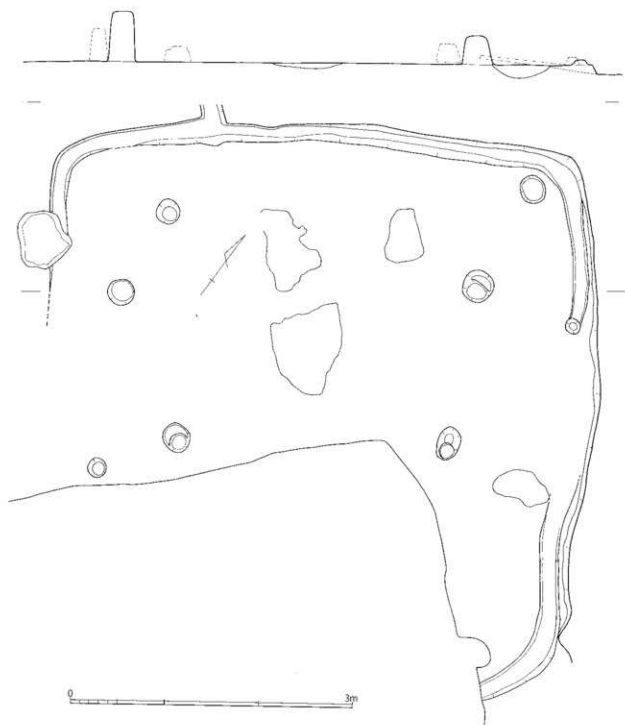
第44図 3次調査区遺構配置図(1/200)



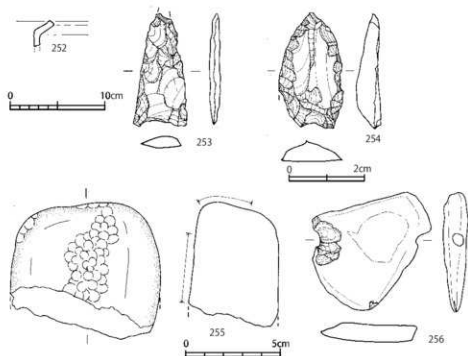
第45図 3次A1号竪穴建物



第46図 3次A1号竪穴建物出土遺物



第47図 3次A2号竪穴建物



第48図 3次A2号竪穴建物出土遺物

図示できる遺物は5点である。第48図252は口縁端部を積み上げる甕。253と254は打製石鏃で、253はサスカイト製、254は姫高産黒曜石製である。255は安山岩製の砥石、256は泥岩製の石錘である。

以上からこの建物の時期を想定するのは難しいが、Ⅶ期（後期後葉）からⅨ期（終末）の第1号竪穴建物を切っているので、Ⅸ期以降と考えられる。

### 3) A3号竪穴建物（第49図）

調査区中央よりやや東側で確認された竪穴建物で、やや押しつぶされた形の隅丸方形を呈する。長軸方向は5.1m、短軸方向は4.0mで、深さは0.15mである。中央やや南側に0.9m×0.8m（深さ不明）の楕円形の土坑があり、内部は炭化物が充填していた。主柱穴になり得る柱穴は確認されなかった。

図示できる出土遺物は10点である。第50図257は頸部に断面三角形の突帯を廻らせる壺、258は口縁部を張り出して刻目を入れ、その下部に二条の刻目突帯を廻らせ、さらに縦方向に刻目突帯をつなぐ下城式土器。259と260は口縁部が「く」字形に折れ開く甕、261は平底の甕底部、262は高坏か鉢の脚。263は結晶片岩製の磨製石鏃、264は金山産サスカイトの打製石鏃、265は泥岩製の砥石、266は砂岩製の砥石である。

以上から、この竪穴建物の時期はⅦ期（後期前葉）と考えられる。

### 4) A4号竪穴建物（第51図）

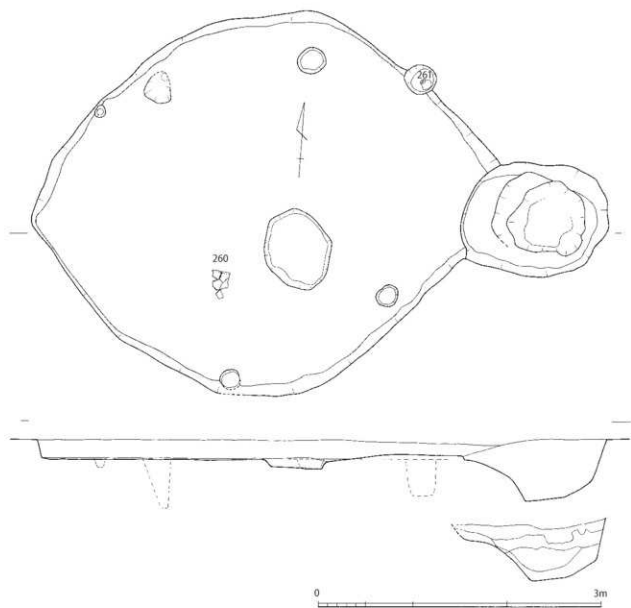
調査区の北東角部で一部が確認された竪穴建物で、隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は不明である。床面からは焼土や柱穴は確認されなかったが、石皿が置かれていたため建物跡とした。

### 5) A5号竪穴建物（第52図）

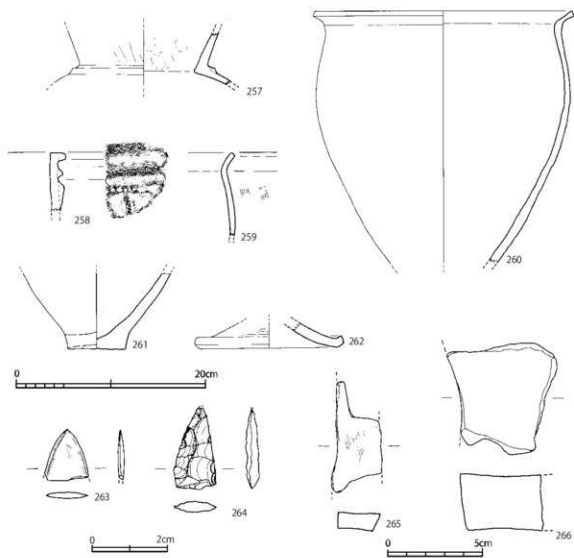
調査区の南寄りで確認された竪穴建物で、A6号竪穴建物に切られている。上部もかなり削平を受けており、床は一部しか残っていない。多角形を呈する竪穴建物の可能性もある。柱穴、炉跡は確認されなかった。

図示できる遺物は5点である。第53図267は複合口縁をなす安国寺式土器壺で、口縁外面は無文である。268と269は外反しながら大きく開く甕で、269には口縁部内面に「ハ」字状の押印文があり、口唇部には刺突文を施す。270は泥岩製の石鏃、271は同じく泥岩製の石包丁である。

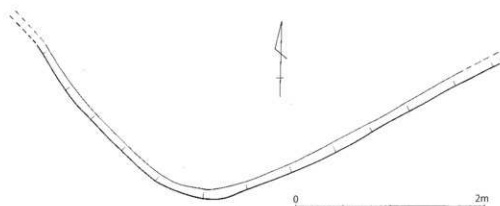
以上より、この建物の時期はⅦ期（後期前葉）からⅧ期（後期中葉）と考えられる。



第49図 3次A 3号竪穴建物

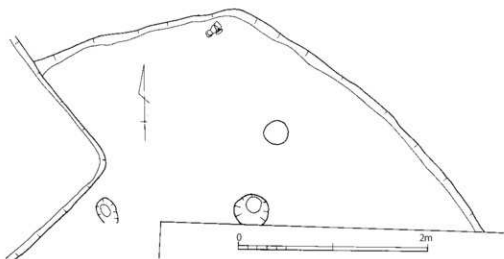


第50図 3次A3号竪穴建物出土遺物



第51図 3次A4号竪穴建物





## 6) A6号竪穴建物 (第54図)

A 5号竪穴建物とA 7号竪穴建物を切って作られた竪穴建物で、一辺4.1mのほぼ正方形を呈する。残存する深さは0.15mである。壁際には幅0.1mから0.2m、深さ0.05mほどの壁溝が全周する。主柱穴は4本で、炉は東側の柱穴間にある地床炉である。また、南側の柱穴間には東西1.9m、南北0.9m、深さ0.1mほどの不定形の土坑があり、内部から土器や砥石が出土している。

図示できる出土遺物は4点である。第55図272は頸部に断面三角形の突帯を廻らせる単口縁の壺、273は内湾する体部を持つ脚付きの鉢。274は土製勾玉で、全長は7.0cmである。275は黒曜石製の打製石鏃である。

以上からこの建物の時期はⅦ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。

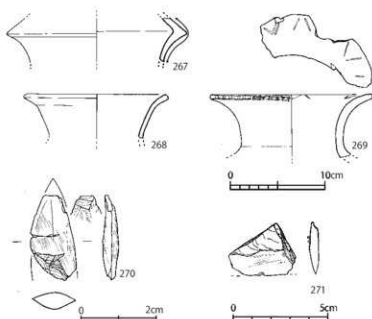
## 7) A7号竪穴建物 (第56図)

A 2号竪穴建物を切り、6号竪穴建物から切られている竪穴建物であるが、南側は削平を受けており、全形は窺い知れない。床面の中央は円形に数cm低くなっており、竪穴建物の重なりも考えられるが、明確ではなかった。床面はほぼ中央と考えられる部分には焼土が認められた。主柱穴となるような柱穴は確認できなかった。

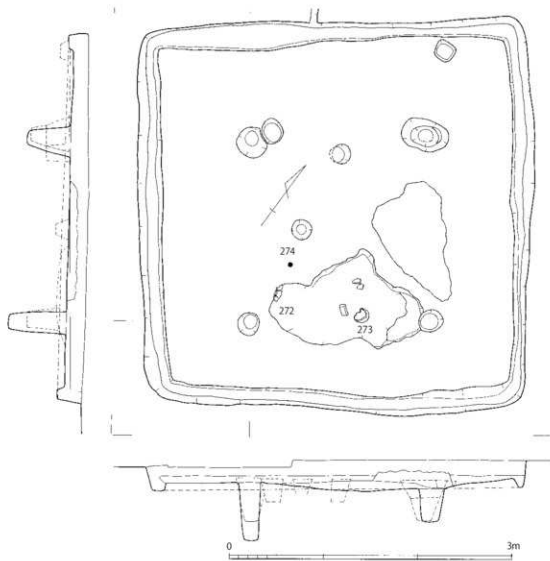
図示できる出土遺物は4点である。第57図276はやや太い突帯を二条廻らせる壺、277は口唇部に刻目突帯を廻らせる甕。278は「く」字形に折れる口縁部の甕、279は混入品の中世の土師質土器環で、底面は糸切り離しのあと撫でている。

時期の確定は難しいが、278から後期と考えられる。

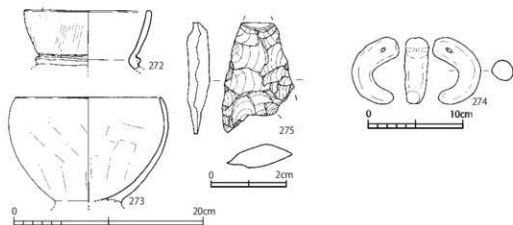
## 第52図 3次A 5号竪穴建物



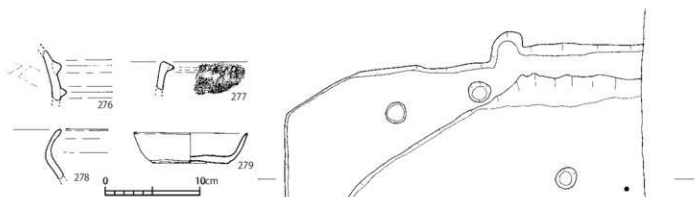
第53図 3次A 5号竪穴建物出土遺物



第54図 3次A6号竪穴建物



第55図 3次A6号竪穴建物出土遺物



第57図 3次A7号竪穴建物  
出土遺物

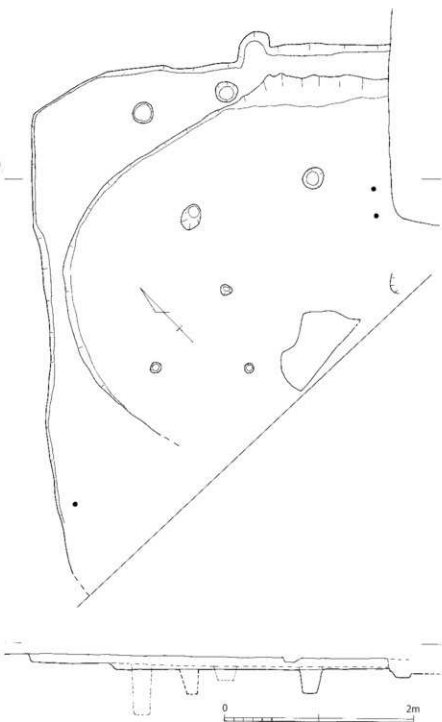
8) B1号竪穴建物(第58図)

B2号竪穴建物の外側にはほぼ相似形に広がる竪穴建物で、北側は一部調査区外になるため、正確な形状は不明であるが、概ね直径約6.9mの円形になるものと考えられる。残存する深さは0.2mほどである。

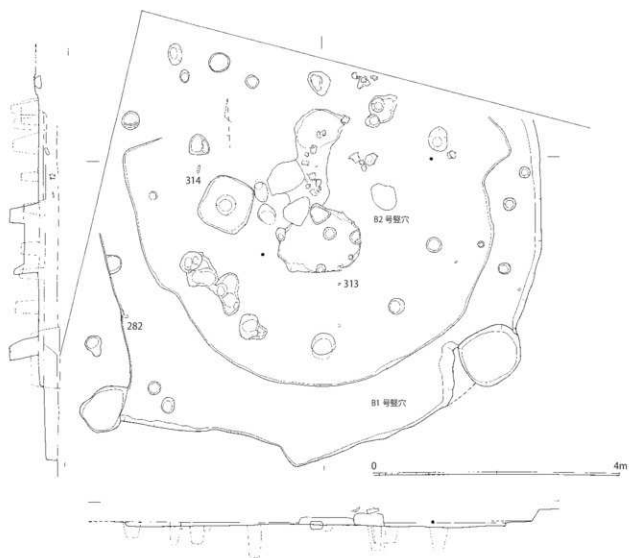
昭和47年の調査時には、ここで示しているようにB2号竪穴建物と別遺構と考えていたが、B2号竪穴建物とした竪穴の主柱穴配置が、やや壁際に寄りすぎていること、B1号竪穴建物の主柱穴が無いこと、などからB1号竪穴建物とB2号竪穴建物は同一遺構の可能性が高いと考えている。そう考えられるとすると、B1号竪穴建物とした部分は一段高いベッド状施設であるのか、あるいは2段掘りの竪穴建物になるということになる。

図示できる遺物は14点である。第59図280は口縁部下に一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕。281は緩やかに外反する口縁部に無刻目突帯を廻らせるもので、縄文時代晩期の深鉢。282は逆し字形の口縁部を持つ甕で、一条の突帯を廻らせる。283は282と同型の甕で、口縁下に突帯を一条廻らせる。284と285は口縁端部を小さく摘み上げる甕、286から291は甕の底部。平底からやや上げ底までである。292は鉢の脚部か。293は緑色結晶片岩製の磨製石鉄未成品である。

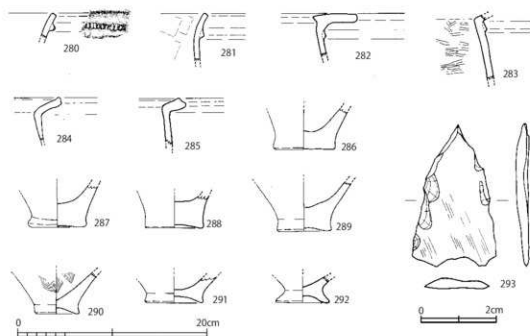
以上から、この竪穴建物の時期はⅢ期(中期中頃)と考えられる。



第56図 3次A7号竪穴建物



第58图 3次B1, B2号竖穴建物



第59图 3次B1号竖穴建物出土遺物

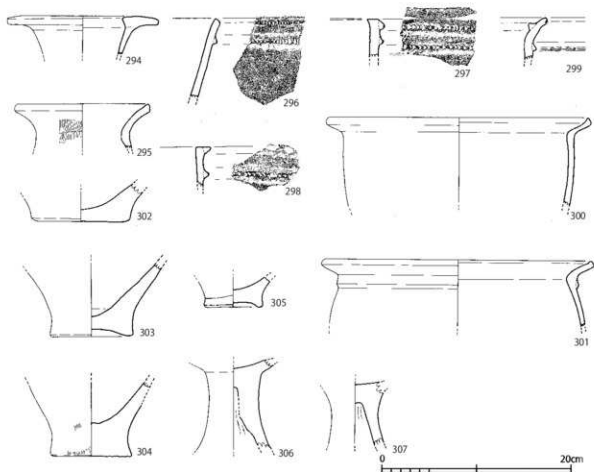
## 9) B2号竪穴建物(第58図)

B1号竪穴建物に重なるように検出された建物で、直径は約5.6mになる円形である。B1号竪穴建物のところで述べたように、本来はB1号竪穴建物と同一の遺構の可能性が高い。北側は一部調査区外になることから、主柱穴が全て確認できていないが、現状で8本が円形に展開するので、本来は10本の柱を有するものとなろう。床面のほぼ中央に南北1.9m、東西0.5mの焼土の広がりがあり、地床炉と考えられる。炉の南側には1.3m×1.0mのやや楕円形を呈する土坑がある。深さは0.2mほどである。

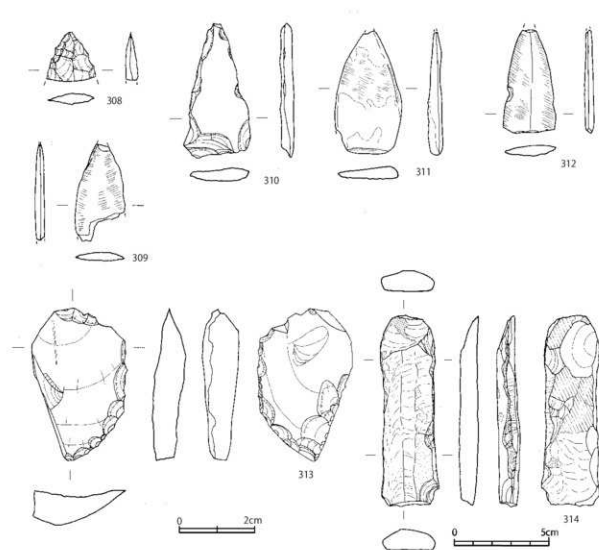
図示できる遺物は21点ある。第60図294と295は壺で、294は鋤先状をなす口縁部。296から298は下城式土器甕で、296は一条の刻目突帯を、297と298は口唇部にも刻目突帯を廻らせる。299は緩やかに外反する口縁部下に刻目突帯を廻らせ、内面には無刻目突帯を張り付けて鋤先状に作る。甕と考えるが、類例に乏しい。300と301は口縁端部を積み上げる東北部九州系の甕。302から305は甕の底部である。平底からやや上げ底状のものまである。306と307は高坏で、脚部は柱状に伸びる。

第61図308から314は石器で、308は姫島産黒曜石製の打製石鏃、309から312は結晶片岩製の磨製石鏃である。313は姫島産黒曜石のスクレーパー、314は粘板岩製の磨製石鏃未製品か。

以上から、この建物の時期はⅢ期(中期中頃)と考えられる。



第60図 3次B2号竪穴建物出土遺物①



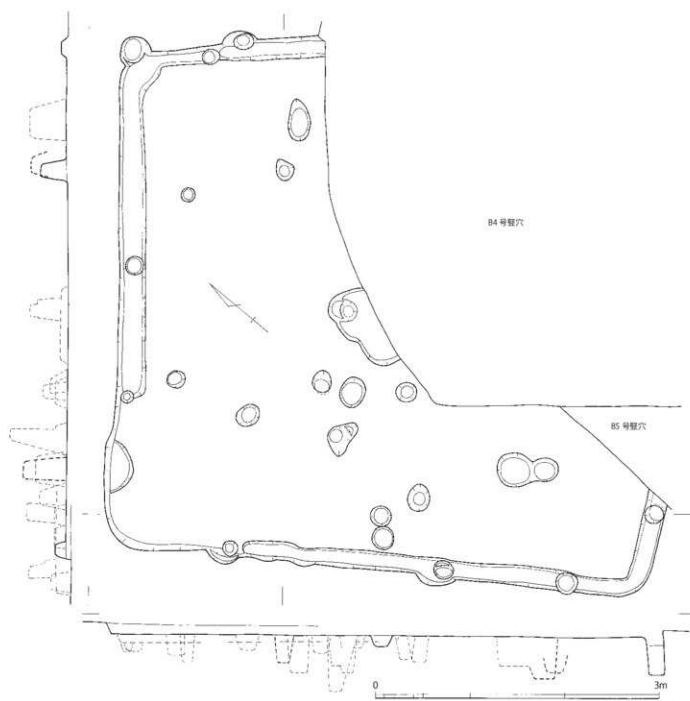
第61図 3次B2号竪穴建物出土遺物②

## 10) B3号竪穴建物 (第62図)

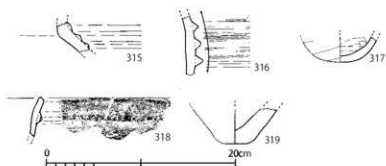
調査区の南東で確認された略南北5.9m、略東西5.6mのやや長方形を呈する竪穴建物である。残存する深さは0.15mほどである。B4号とB5号竪穴建物に切られている。壁際には北西角部を除いて、幅0.15mから0.25m、深さ0.05mほどの壁溝が廻る。主柱穴は4本と考えられるが、確定はできなかった。床面中央にはB4号竪穴建物に切られた土坑(長軸0.9m)があるが、焼土は確認できなかった。

図示できる遺物は5点で、第63図315と316は安国寺式土器壺の頸部突帯と胴部突帯である。317は丸底の小型壺である。318は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、319は小さな平底をなす甕底部である。

以上より、この建物の時期はⅤ期(後期前葉)からⅥ期(後期中葉)と考えられる。



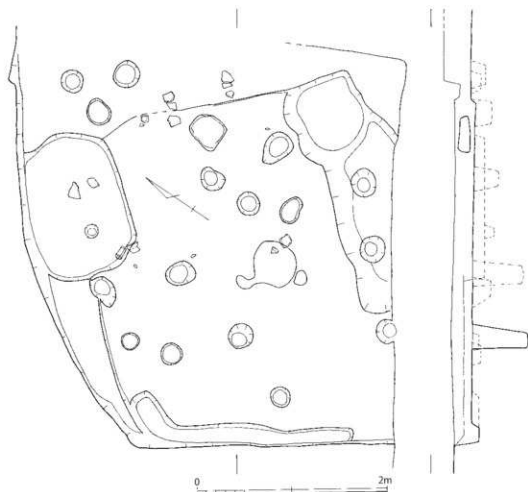
第62図 3次B3号竪穴建物



第63図 3次B3号竪穴建物出土遺物

## 11) B4号竪穴建物(第64図)

B3号竪穴建物を切って作られた方形を基調とする竪穴建物である。南側と東側が調査区外になるため大きさは不明である。西側の壁際には一部壁溝が残っている。中央やや南寄りには焼土があり、地床跡と考えられる。また、南側には幅0.8mほどの長方形を呈する土坑があり、その北端の円形に窪んだところには炭化物が多く認められた。ピットも多数検出できたが、支柱穴は不明である。

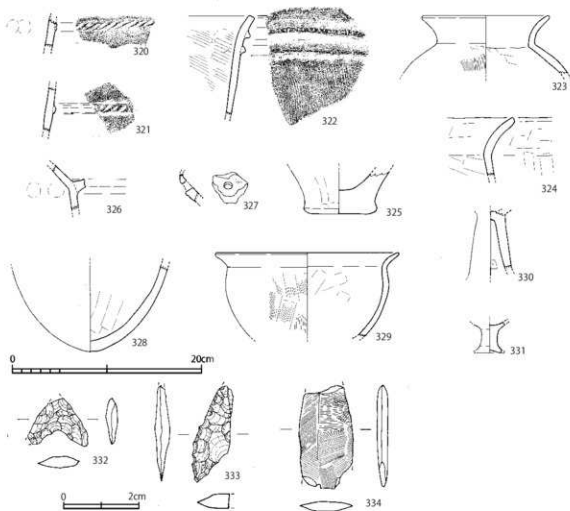


第64図 3次B4号竪穴建物

図示できる出土遺物は15点である。第65図320と321は安国寺式土器壺の胴部に廻る扁平突帯。いずれも斜行の押圧文を施す。322は口縁部が緩やかに開く下城式土器甕で、口縁下に二条の刻目突帯を廻らせる。323と324は「く」字形に開く甕の口縁部、325は外側に少し踏ん張る形の甕底部、326は複合口縁甕で、屈曲部は突帯状に強く突出する。327は頸部に穿孔がある小型壺。328は丸底の甕底部、329は鉢で、脚が付くかもしれない。330は脚部が柱状になる高坏、331はミニチュア土器の高坏か。332と333は姫島産黒曜石製の打製石鏃、334は粘板岩製の磨製石鏃である。

以上より、この竪穴建物の時期はⅨ期(弥生終末)と考えられる。





第65図 3次B4号竪穴建物出土遺物

## 12) B5号竪穴建物

B3号竪穴建物を切り、B4号竪穴建物に切られた竪穴建物で、壁の一部が残りのみある。南側は調査区外になることから全形がうかがい知れない。確認された範囲ではピットや焼土はなかった。

図示できる出土遺物は1点のみである。第66図335は壺の胴部で、断面三角形の突帯が4条廻る。この資料が建物の時期を示すとすれば、Ⅳ期（中期後葉～末）からⅤ期（後期初頭）が考えられる。



第66図 3次B5号竪穴建物出土遺物

## (3) その他の遺物

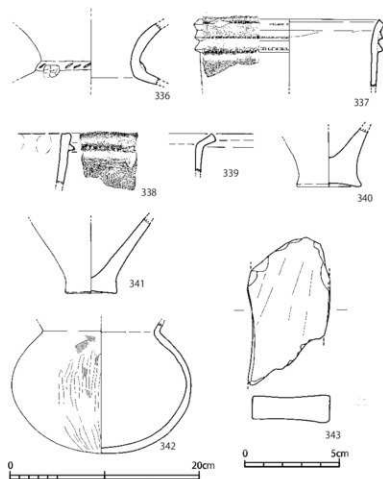
ここではB1号竪穴建物とB2号竪穴建物のどちらに帰属するか不明な資料（336から343）と、調査時に表採した資料（344から375）を紹介する。

第67図336は頸部に扁平な刻目突帯を廻らせ、勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、337と338は刻目突帯を廻らせる下城式土器壺、339は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の壺、341は平底の壺底部、342は丸底の壺である。343は泥岩製の砥石である。

1号、2号ともⅢ期（中期中頃）としたが、336はⅤ期（弥生終末）の資料であり、出土が間違いないならば、どちらかがⅤ期に下る可能性がある。

第68図344から346は小川原式土器と考えられる壺の口縁部である。口縁部は鋤先状をなして、344と345は

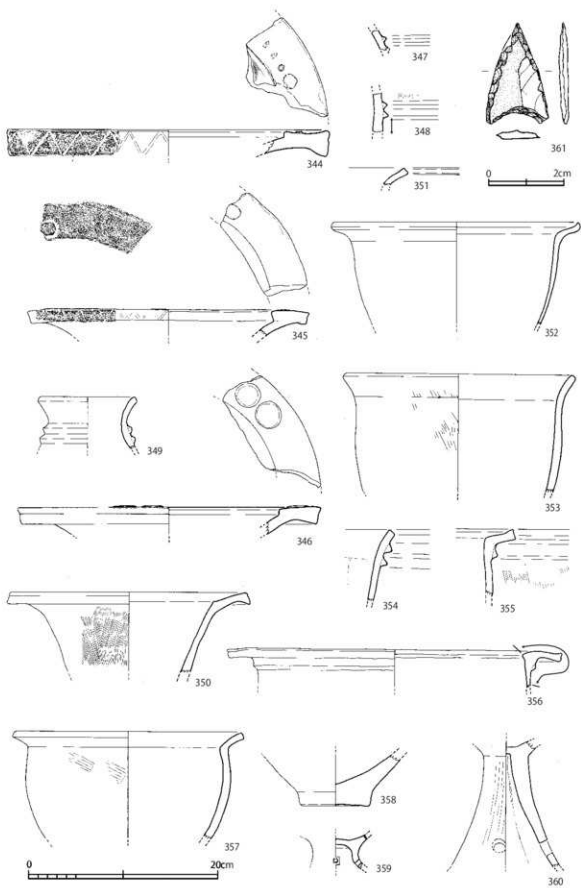
外面に連続山形文を施し、上面には円形浮文を付す。347と348は断面三角形の突帯を廻らせる壺、352から356は甕。352と355は口縁端部を積み上げる東北部九州系の甕、353は口縁部が緩やかに開く甕、354は二条の突帯を廻らせる下城式土器甕であるが、刻目はない。356はベンガラが塗布された逆「L」字状の口縁部の甕である。357は鉢、358は平底をなす甕の底部、359は穿孔のある鉢の脚台か。360は高坏の脚部で裾が緩やかに開く。361はサヌカイト製の打製石鏃である。



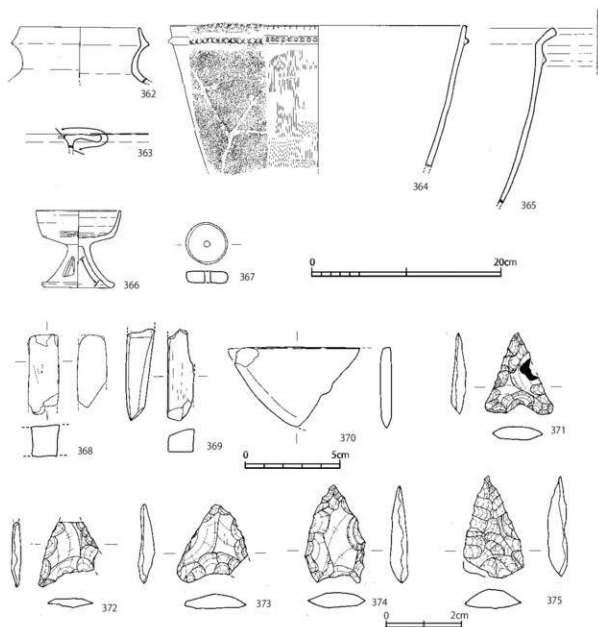
第67図 3次A1、A2号竪穴建物出土遺物

第69図362から375は出土地点  
がA区かB区か不明な資料である。  
362は複合口縁をなす壺、363は逆  
「L」字状の口縁部の甕である。364  
は一条の刻目突帯を廻らせる下城式  
土器甕、365は口縁端部を積み上げ  
る東北部九州系の甕で、口縁下に一  
条の突帯を廻らせる。365は須恵器  
高坏で、脚部に透かしを持つ。367  
は直径4.4cmの土製紡錘車である。  
368と369は泥岩製の砥石、370は  
泥岩製の石包丁、371から375は打  
製石鏃で、371はガラス質安山岩、  
372から374はサヌカイト、375は  
姫島産黒曜石製である。

この3区の一括資料は、344から  
346に象徴されるように、雄城台遺  
跡では遺構の少ないIV期(中期後業  
~末)の資料を含むので、3次調査  
区あたりに当該期の遺構が展開して  
いた可能性が高い。



第68圖 3次一括遺物①



第69図 3次一括遺物②

(4) まとめ

3次調査では、比較的残りの良い（プランの明確な）、明確に壁溝が廻る竪穴建物が確認された。この地区では貯蔵穴などの土坑は確認されておらず、台地の周辺部に近い部分には主に竪穴建物が建っていた可能性が考えられた。